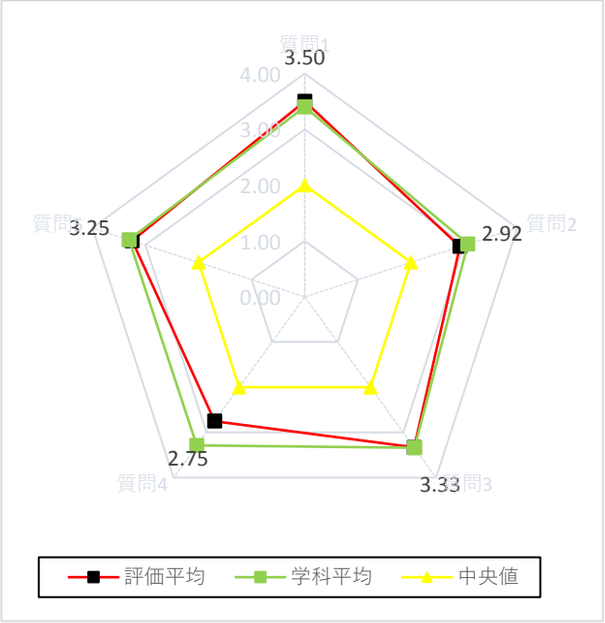
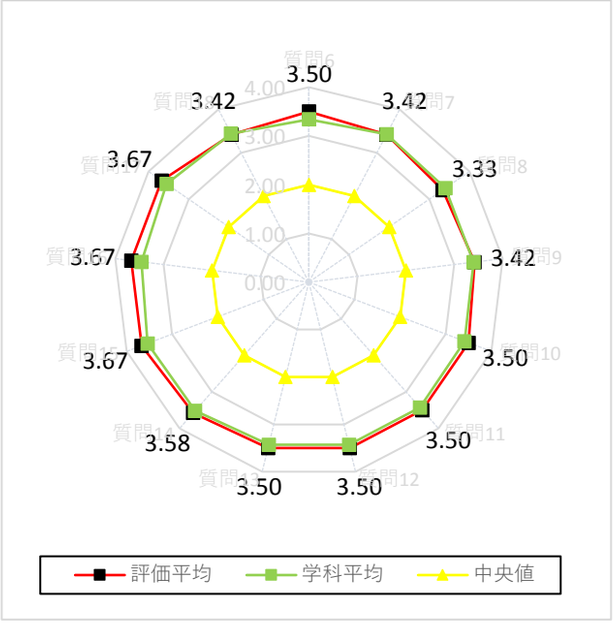
学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	16名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

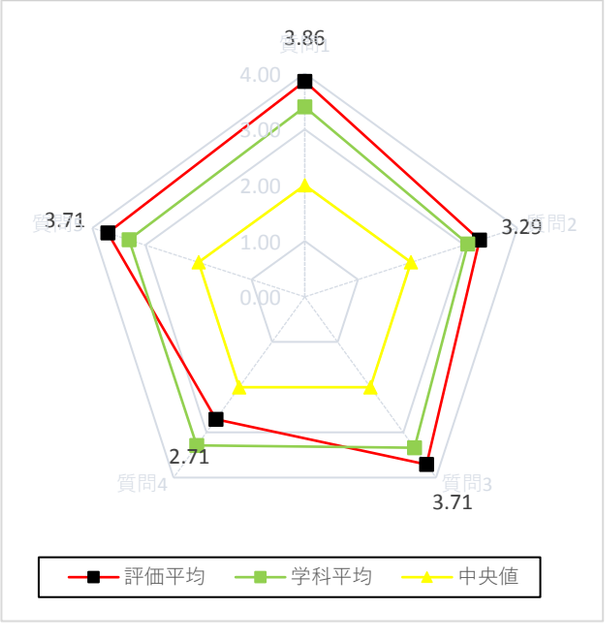
「学生自らが授業を理解し自分で工夫する」の不足が目立っている。学生が授業の目的を十分に理解しないまま、授業参加しているのではないかと分析する。年度当初に学生の理解に繋がる十分な説明が不足していた可能性もぬぐえないが、理解は出来ているが、積極性がなく自ら一歩踏み出す力の不足も考えられる。5/8名（63%）の意見であり、過半数を満たしているため信頼できる値と判断する。

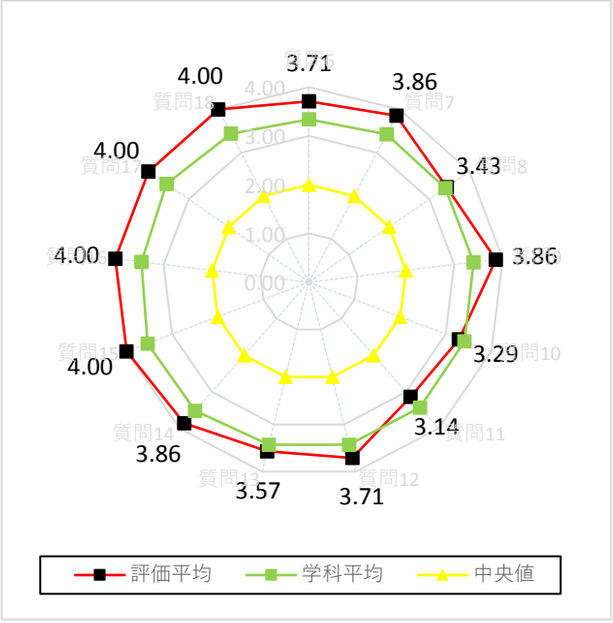
（３）次年度に向けての取り組み

年度当初に授業の特徴、魅力について十分な説明が必要である。その上で、学生の理解度を確認し、必要に応じて繰り返し説明が必要と考える。全体授業はもとより、グループワーク、ボランティアレポートやポートフォリオへのコメント等を通じ、教員のこまめな関わりが学生理解に繋がると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	14名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

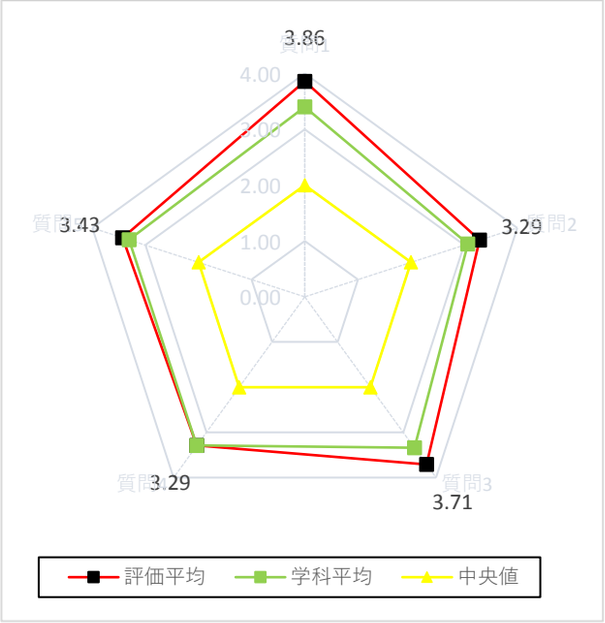
大学生活のスタート時点における学修および学生生活の支援を行うことを目的とし授業展開がなされた。学生は、入学当初は学生間の交流も乏しく緊張した面持ちであったが、本講義を通して、仲間意識が高まり、学生生活へもスムーズに順応していくことができていた。ただ、質問4の結果から学生は能動的に授業に取り組むのではなく、受動的になっていた可能性が高く、また質問11の結果より、テキストの活用について理解ができていなかった可能性が大きい。

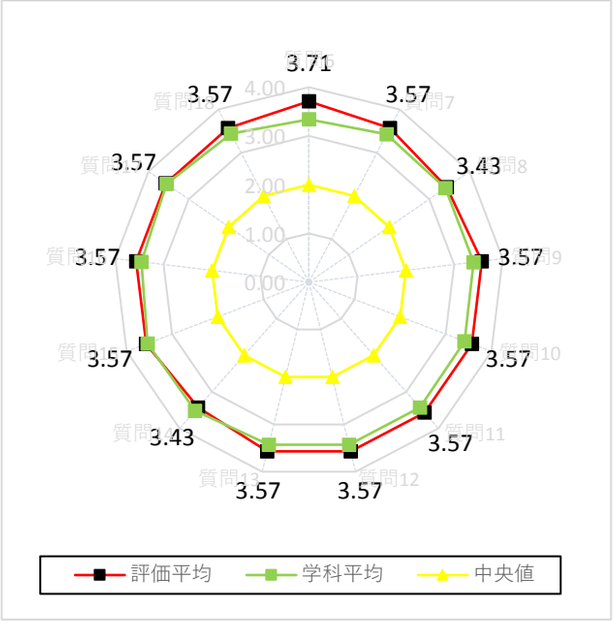
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、学生が主体的に授業に取り組むことができるように適宜授業の進捗状況とともに学生の理解度を確認し、学習意欲をフォローをしていく取り組みを行う必要がある。教科書やテキストの活用についても予習・復習の必要性を十分に伝え、自ら活用できるよう支援していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ 基礎（初年次教育含）	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

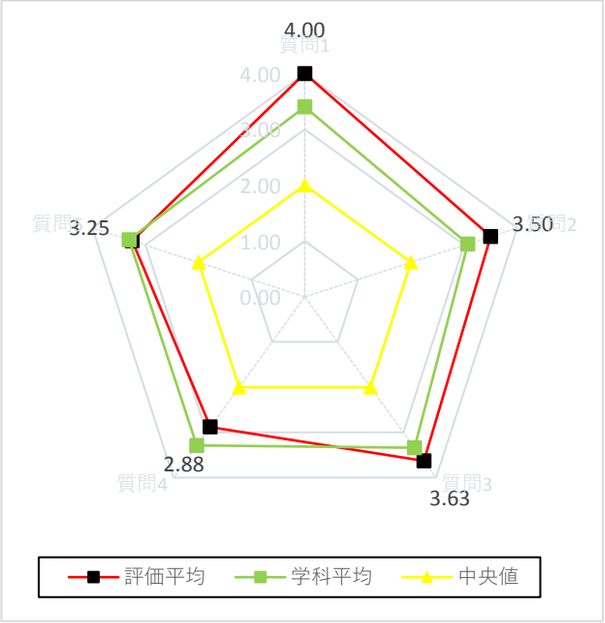
「あすなろうⅠ」は初年次教育として大学での学びを、読み、書き、コミュニケーションが人と人との関係において取れるようななることを目的に計画しています。さらに、ボランティア活動を学生のみなんさんが主体的に登録して、実践活動を行いその結果をレポートで報告し担当教員でのコメントを受けて得点（ポイント）につながるシステムになっています。また、社会人基礎力確認テストを授業開始時の4月と終了時の12月に実施しています。その確認テストは、学生全体の評価では伸びていました。その成果は、ボランティア活動が大きく影響していると考えます。ボランティア活動を最初はポイントのためにやっていた学生も、後半からボランティは自分自身のためと気づき、取り組む姿勢と心構えが変化しています。学生の皆さんが通年を通して参加できた授業のため、評価項目がすべて平均以上の結果を示しています。この授業目的・目標を全員が達成できたと考えます。

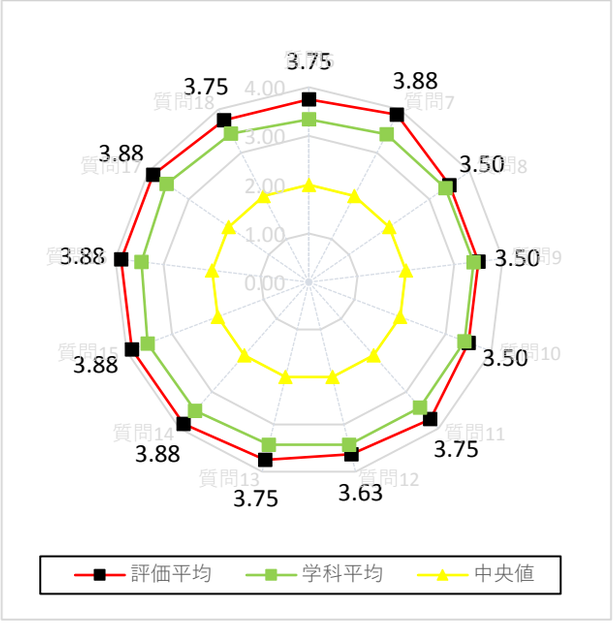
（３）次年度に向けての取り組み

この授業を看護学科の教員と共に担当して3年目を迎えます。授業計画内容を、今年度担当教員の振り返り意見と、次年度担当教員の意見を交えて計画を次のようにブラッシュアップします。
①レポート課題4つは、年度の初めに提出課題と評価視点を示す
②前期に防犯について小城警察署の職員から護身術を含めた実演とSNSに関するトラブル回避等を学ぶ
③後期の第1回目の授業でBLS（救急蘇生法）とAEDの使い方について小城消防署の救急救命士から実演と実習を通して学び、学生に救急救命資格証を発行していただく（看護師免許を取得するといつでもどこでも救急救命は実施できますが、在学中は免許がありません。医療人としての学びを始めた学生のみなさんが、いつでもどこでも人命救助に関与できるようにと考えて計画する）
④先輩の看護師・保健師・助産師の話を聞き、将来のキャリア開発について自分自身の考えを持つ
⑤1年間のボランティア活動をグループでまとめパワーポイントを用いて発表できる
⑥オープンキャンパスなど大学行事に参加し、西九州大学の学生としての誇りを持ち愛校心を育成する
以上の計画に主体的な参加を期待します

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

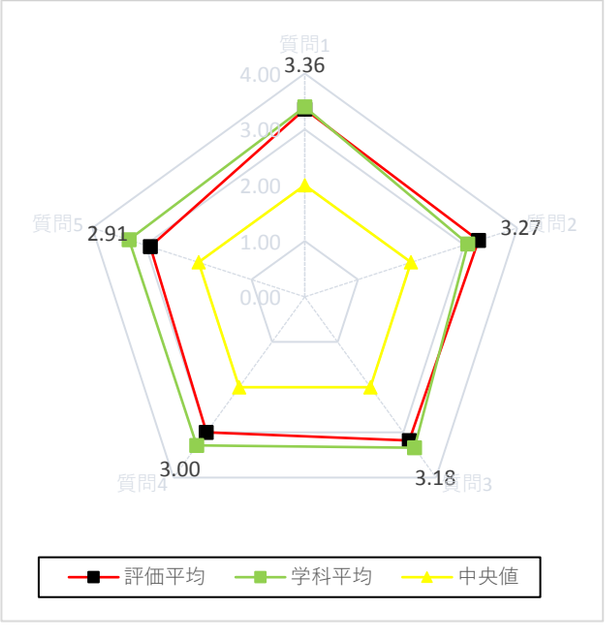
前期：総合評価は3.8と高く、教員の対応4項目は4.0と高評価だった。
ゼミでの少人数の学修は意見交換しやすく、個人個人の発言の機会がとれるので、メンバー間の交流につながった。
地域へ出かけての授業形態は小城の街を知ることで佐賀県内の地域への関心を少なからず広め、
ボランテイア活動への関心にもつながったと思う。
ボランテイア活動は学生間で進捗状況の差があったが積極性や選択した活動に影響しているようだった。
意見交換で学びをポスターにまとめる事で活動の意義について見直す機会となっていた。
後期：総合評価は3.67と高かった。全般的に前期より評価がやや低くなっていた。
講義も4コマの講師の講義後のレポート作成があり、内容のダブりもあり、
同じような内容のレポートとなってしまうため、書きづらい面があったと考えられる。
後半はゼミの中でボランテイア活動の内容の意見交換を行う事で大変刺激になっていた。
その内容を要約したり、発表の準備ではやや学生間の差が出た面はある。
ポータルサイトへの記載は自己の振り返りとなり、次回への意欲へもつながり、ボランテイア活動の意義の理解も深まっていた。
自主性の

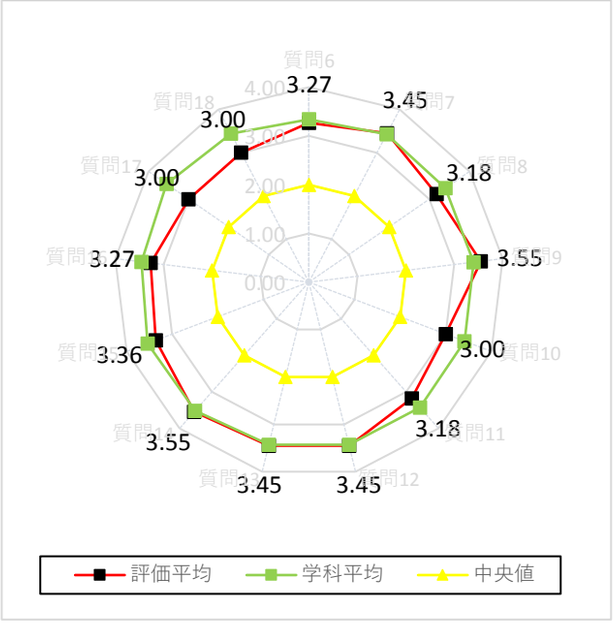
（３）次年度に向けての取り組み

前期：ポートフォーリオの記載状況が良くなかったので、教員の確認ややり取りをもう少し多くする必要があった。
後期：学生の自主性に任せていた面はあったので、かかわりの時間を増やす必要とポートフォリオの促しをもっと行う必要があった。
レポート作成については課題を変更する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅠ　基礎（初年次教育含）	16名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

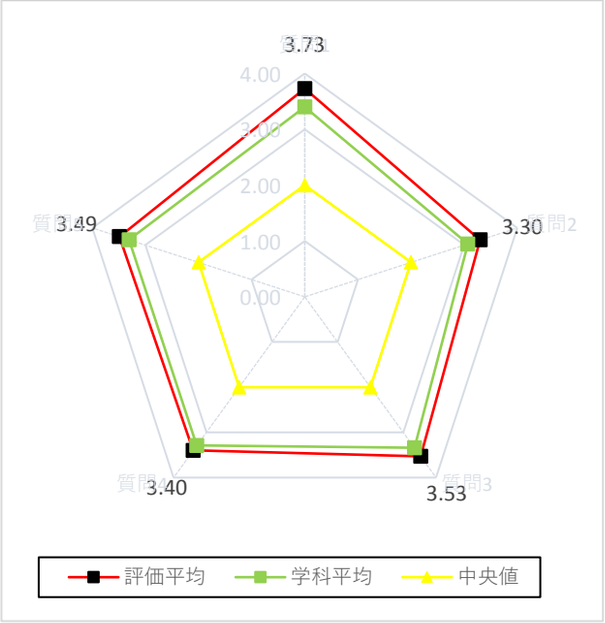
学生の反応がなく、どこまでを理解できているかという確認がとりずらい状況であったように思う。グループワークにおいても、学生間の協調性が無いせいか、活発にやっている印象はなかった。役割分担も、グループで決めることができておらず、グループでまとめて提出する内容も時間が守れていないことが多々みられた。指導をしても反応がなく、正直指導に困ったのが一番の評価である。最初の回より、丁寧に説明してきたつもりだが、返事も反応もなかった。一人の学生に事情を聴くと、みんな仲が悪いメンバーだったとの意見があった。

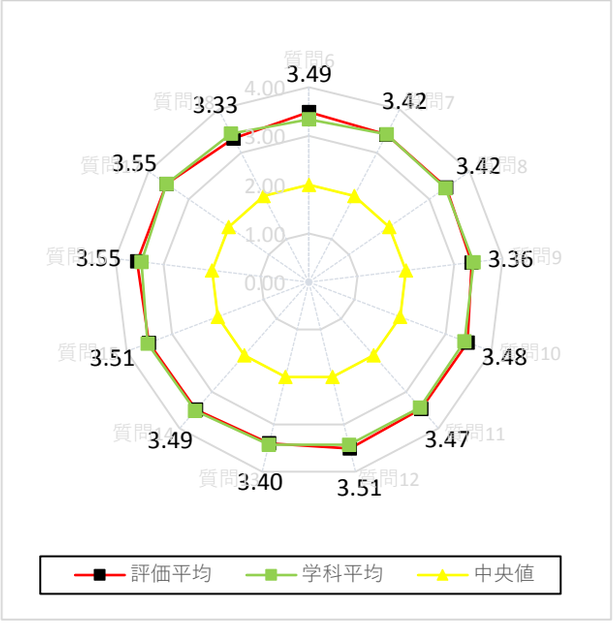
（３）次年度に向けての取り組み

グループの人数が多いと感じた。8名のグループワークは、一生懸命やる学生と、そうでない学生がはっきりしており、グループワークが成立していないように感じた。グループの人数をもう少し検討する必要があると考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		あすなろうⅡ 応用（地域課題）	182名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

あすなろうⅡでは、実習に備えたシミュレーション機器を使用した「実践統合演習」と地域に出向き地域課題を探る「地域課題演習」の二本柱での取り組みを行った。学生は演習の意図を理解するにつれ、自主的に行動できるようになり、学生同士や住民との交流の中から、人々の暮らしやその背景を持つ人々への看護についての学びを演習を通して深めることができたようである。

「実践統合演習」の自由記述に、「患者役は枕では厳しい、教員を充ててはどうか」と意見があった。シミュレーション教育であるため教員も学生も全員参加できる学習スタイルを考えると、モデル人形を使用することが望ましい。しかし、グループ数が多い場合、モデル人形数が限られているため次年度は、指導に当たる教員間で検討したい。

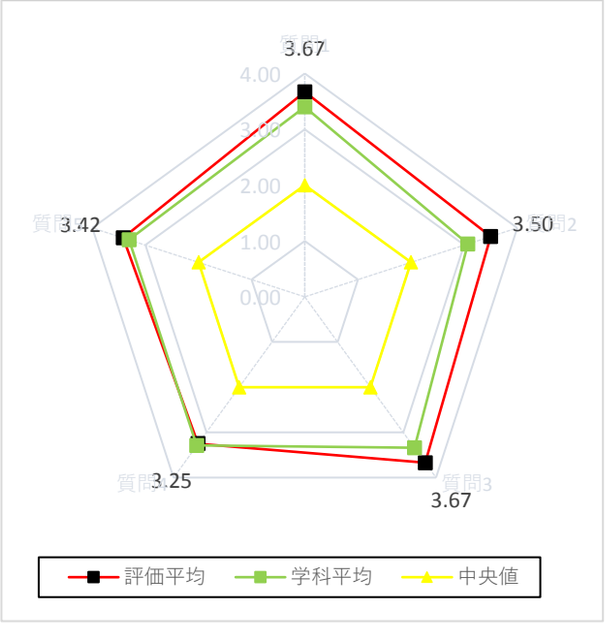
（３）次年度に向けての取り組み

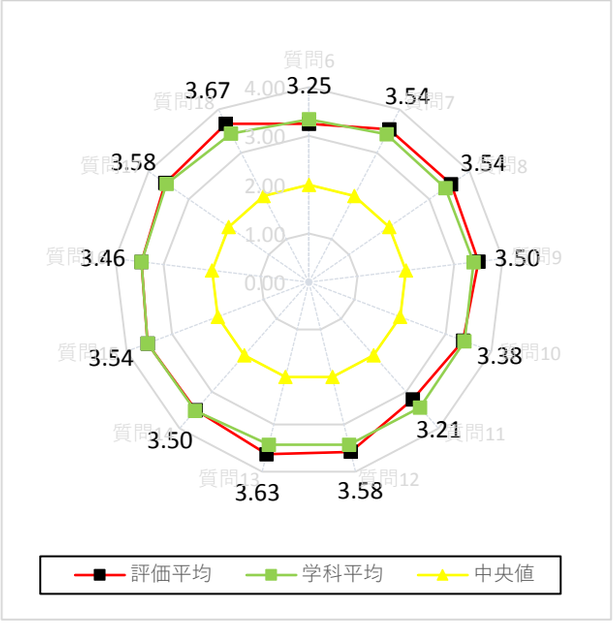
地域課題に関する演習が、前期と後期にまたがり、一貫性を欠いたものになった。次年度は前期と後期で演習を分けて、目的と内容をより理解しやすいように構成する計画である。

加えて、「実践統合演習」は前期に計画しているが、「看護過程論」と関係が深いため、「看護過程論」の授業の進度と関係を密にしながら計画を進めていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		フィットネス・スポーツ	33名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

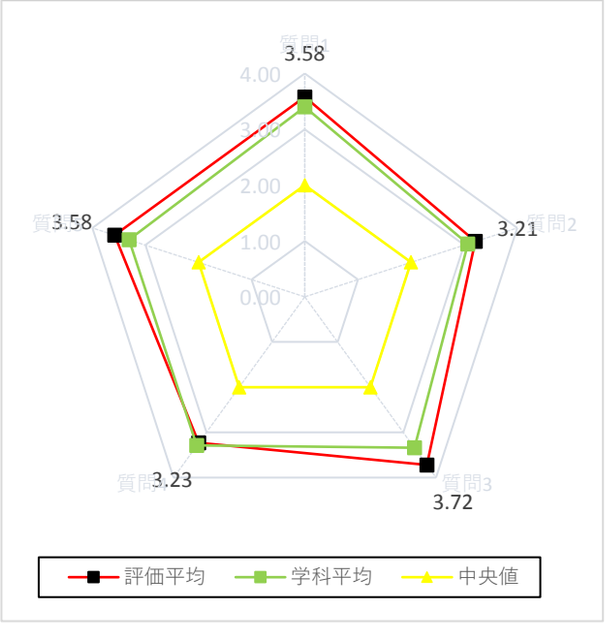
学生の自己評価は質問4以外は高い。
シラバスについての説明は最初の授業で口頭説明したが、評価は学科平均より低い結果となっている。
また、教科書は実技科目のため使用していない。配布資料は自己評価資料を記入させ、評価の参考にしているが学科平均より低い結果となった。
その他の事項に関しては学科平均と同等か高い値であったので学生は満足していると思う。

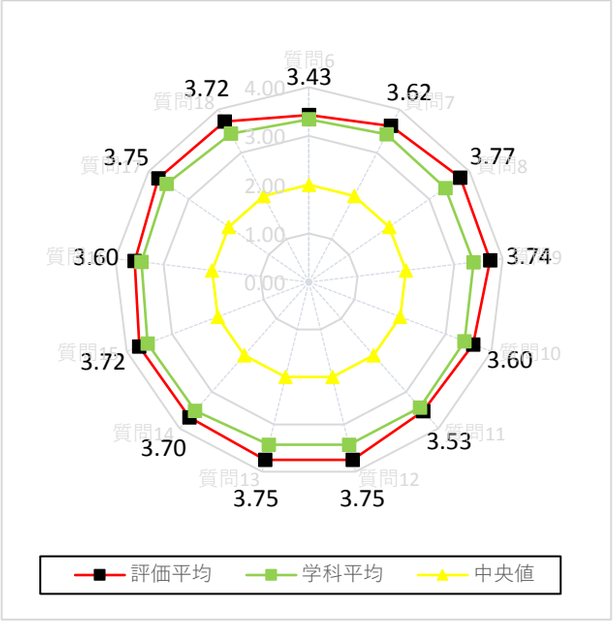
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの丁寧な説明を行う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		フィットネス・スポーツ	64名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

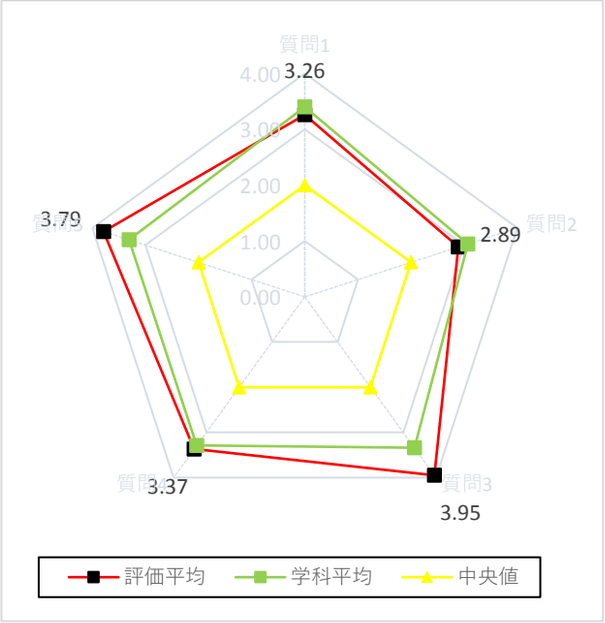
入学から半年たち、友人とも慣れてきて楽しく身体を動かせたのではないか、と思う。

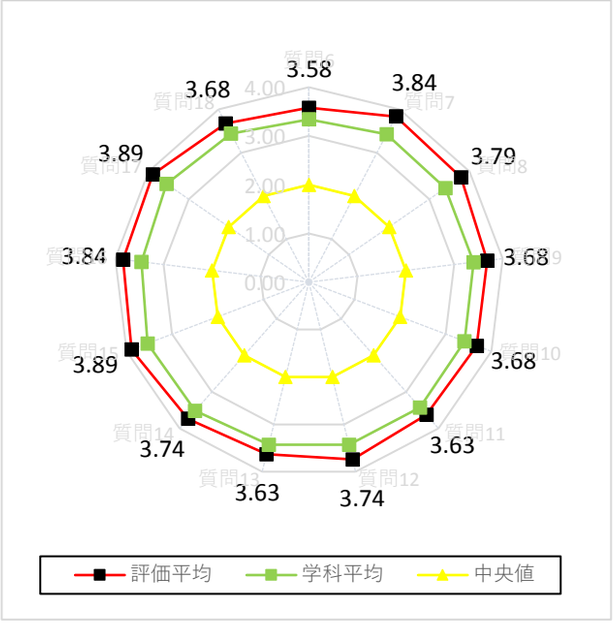
（３）次年度に向けての取り組み

怪我のないよう注意しながら、様々なスポーツを紹介して生涯にわたってスポーツとかかわれるように授業準備をする。
楽しい雰囲気作り。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		ウェルネス・スポーツ	33名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

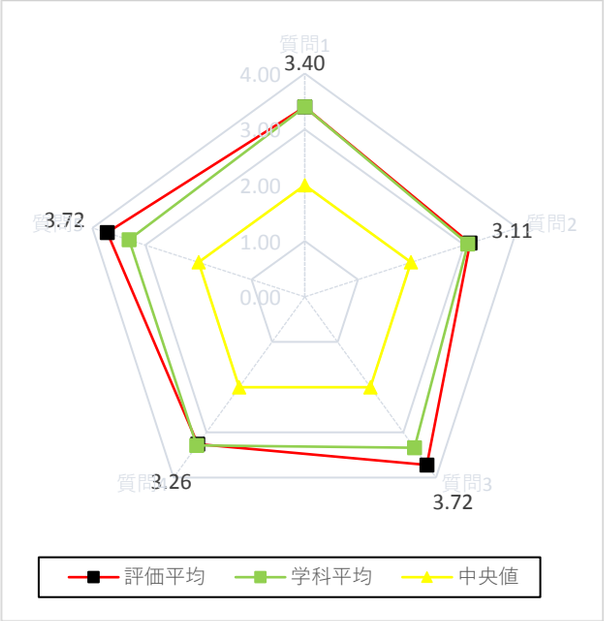
履修者33名のうちの19名からの回答があった。全体で評価平均が3.0を下回った項目が質問2のみで、他の項目ではほぼ3.5以上の評価を得たことで、おおむねこの授業においては良好であったものと考える。それは、質問5および質問18の総合評価の結果からもうかがえる。質問2に関することで授業最初のガイダンスで説明をした通り、屋外での授業では天候状況により授業内容も変更、工夫が必要であったり、受講学生の関心や用具数等でシラバス通りの授業展開が難しい部分がある。そのことで、多少評価に影響したかもしれない。また自由記述では、多くのスポーツ経験ができたことなどの好意的意見があったものの、説明が少し長い等の意見もあり、今後に活かしたいと思う。

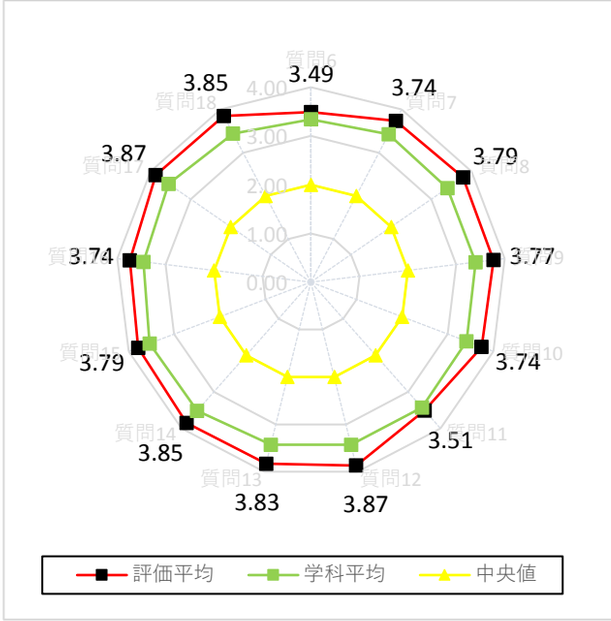
（３）次年度に向けての取り組み

次年度はこの授業を担当しないが、今回の授業評価の結果を他の授業に活かしたいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		ウェルネス・スポーツ	64名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

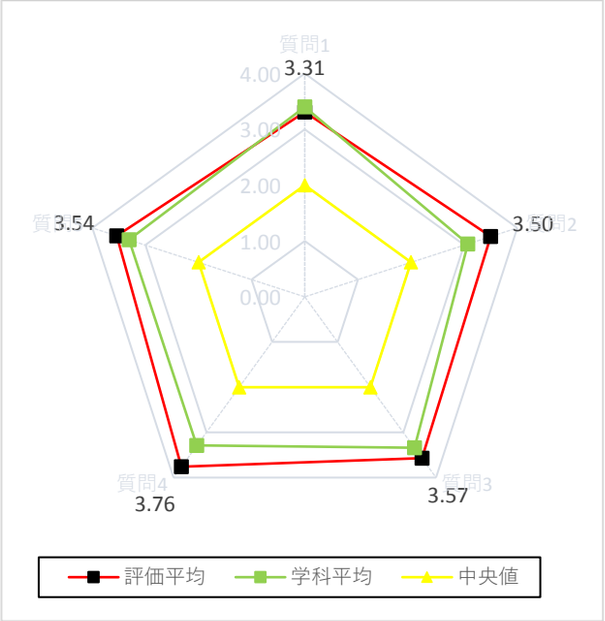
友人たちと楽しく身体を動かせたのではないか、と思う。

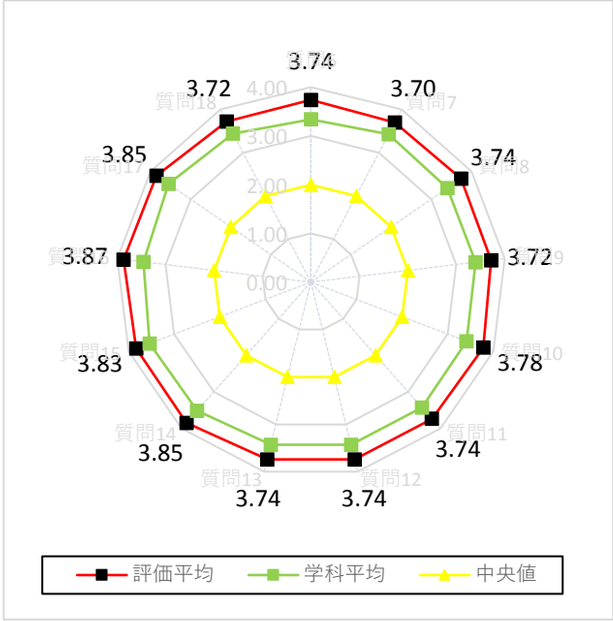
（３）次年度に向けての取り組み

怪我のないように配慮しながら、楽しく身体を動かし技能力や体力アップできる授業計画と準備。
生涯にわたってスポーツと関われるように、様々なスポーツを紹介。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		Basic English Ⅰ	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

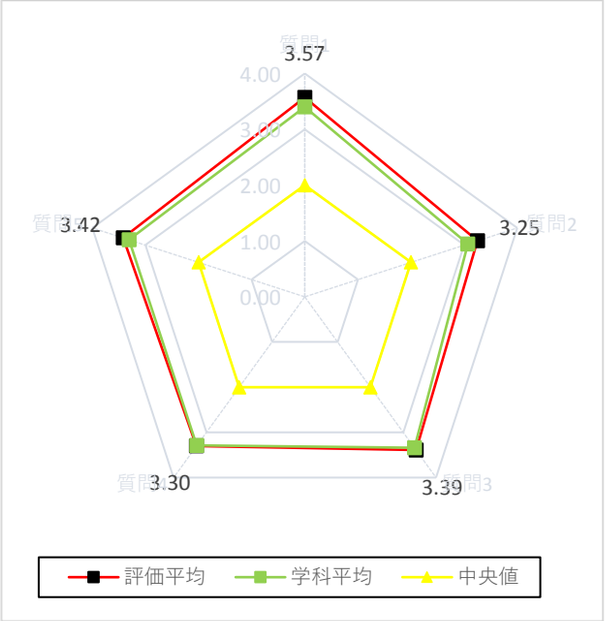
看護学部　看護学科　科目名　Basic English Ⅰ　担当　綱　智子　96名履修
殆ど全ての項目で学科平均を上回り、ほっとしている。担当者の意図したところは伝わったのではないかと思う。
どれも評価はよかったが、質問10「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか」が他よりもやや高かった。この授業ではパソコンやDVDを使ったが、この項目が高いのは、教材だけではなく、大学のパソコンやプロジェクター、スピーカーの性能がよいことも一因であると思う。他の大学の機器に比べて、特に看護学科のある小城キャンパスの機器は優れており、スクリーンも大きくて見やすい。
自由記述では、映画のDVDを使った授業であったことを評価するものがいくつもあった。学生の皆さんも楽しんで学んでくれたようだった。
ただ、この授業の中核である音読自体については、「同じところを何度も読むので楽しめなかった」という旨の意見が1つあり、他には音読に関する感想がなかった。音読の重要性については、これからも学生の皆さんにわかりやすく解説し、学生の皆さんが授業内外で音読の活動を続けられるようにしていきたい。

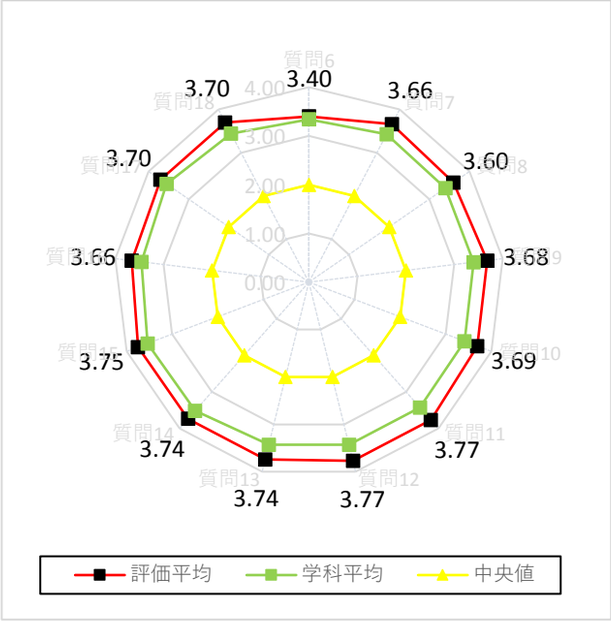
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の取り組みが概ね好評であったので、同じような授業を次年度も行いたい。授業では、映画脚本の日本語訳及び音読と、Basic English Ⅰ共通教材である単語プリントの学習を行っているが、映画教材は同じものを使わず、できれば毎年変更したい。
看護学科の授業であるので、来年度には世界的な流行を見せている新型コロナウィルスについての世界各地の情報を英語で読んだり聞いたりするような機会も少し取り入れてみようと思っている。インターネットにアクセスできるパソコンをこれからも活用していきたい。
また、クラスのメンバーがアクセスできるようなインターネット上のフォルダがあれば、たいへんありがたい。ポータルサイトのどこかに、アンケートだけではなく、教材のプリントを入れておくようなフォルダがあれば、欠席した学生もプリントをそこからダウンロードして利用することができる。ぜひご検討いただければと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		情報処理入門	96名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

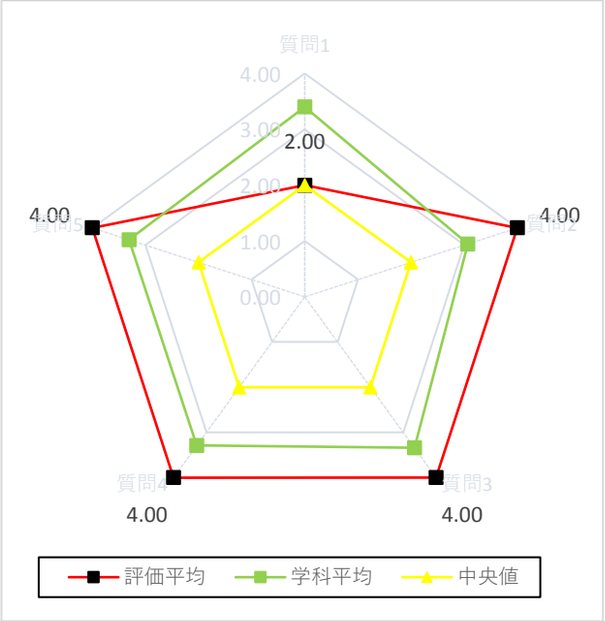
本科目は、座学での解説と演習の実技を行う科目である。したがって、講義の目的がわかりやすく、学生も取り組みやすかったのではないかと考える。ただし、演習については完成例を目指して作業することが多いため、「質問４」のような工夫を行う事までは取り組まない学生がいると考える。その点は、今後改善していきたいと感じた。

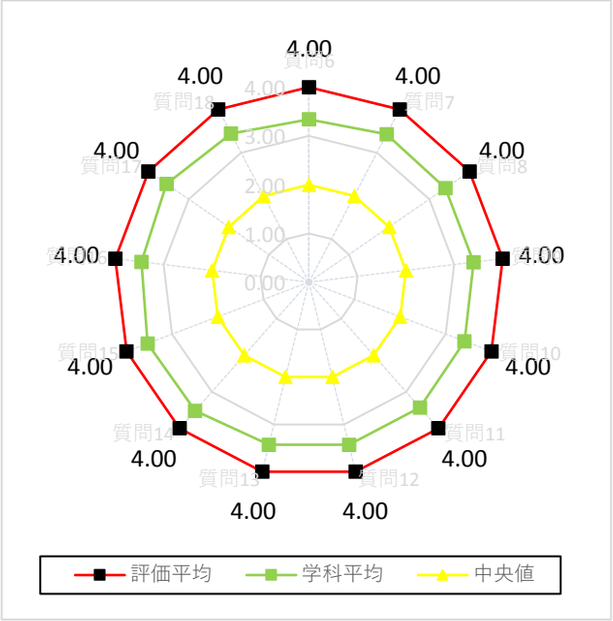
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、上記の問題点を踏まえ、学生の創意工夫を評価するような仕組みを作っていければと考えている。学生の創意工夫が見られる課題については、追加点数付与などを実施していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		情報処理基礎	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

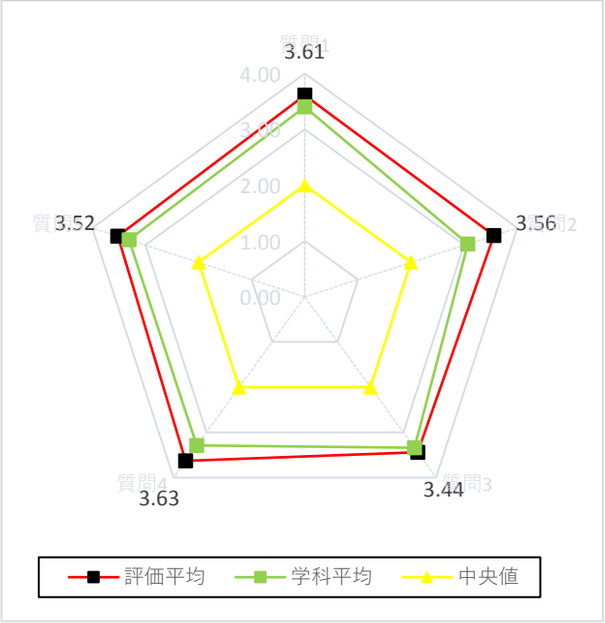
質問１については、値が低いのは、一部欠席が多い学生がいたためと考えます。
他の項目では、概ね高い評価を頂いていると考えます。

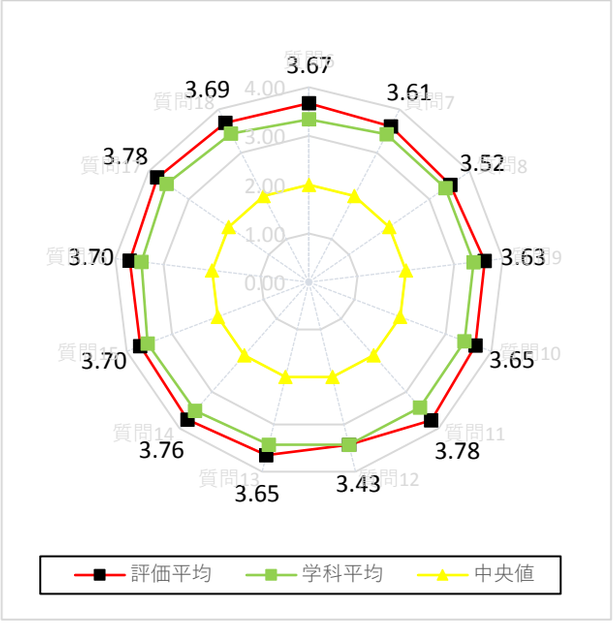
（３）次年度に向けての取り組み

基本的に本年度のやり方を踏襲する予定です。
欠席については、講義の冒頭にて、注意喚起をすることで改善できればと考えます。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病理学	98名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

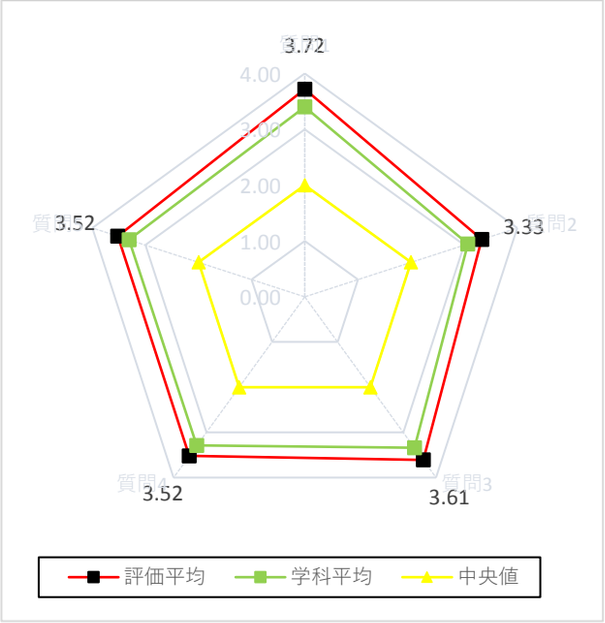
1)学生による向井への評価について、評価者は54/97である。
2)学生によるコメントは毎回小テストならびにプリントがあってよかったことなど、なべて好意的である。一方では、私の講義の言葉がハッキリ伝わらないこと(滑舌が悪い)、メリハリつけた講義ではなかったこと、などの指摘があった。
3)私への評価点は昨年と比較して、すべての項目で高くなっている(質問項目：6-18)。
4)看護学科の平均値と比較して、１項目を除き（評価項目12）ほかの項目はそれを上回っている。ちなみに昨年は全ての項目で平均値より低かった。
5)昨年と比べて評価が向上している要因としては、昨年の「結果の分析と評価」欄に記載した改善策を実直に実施したことにより、昨年と比較して評価が学科平均値より相対的に高くなっており、そのことが評価の向上を裏付けていると思われる。

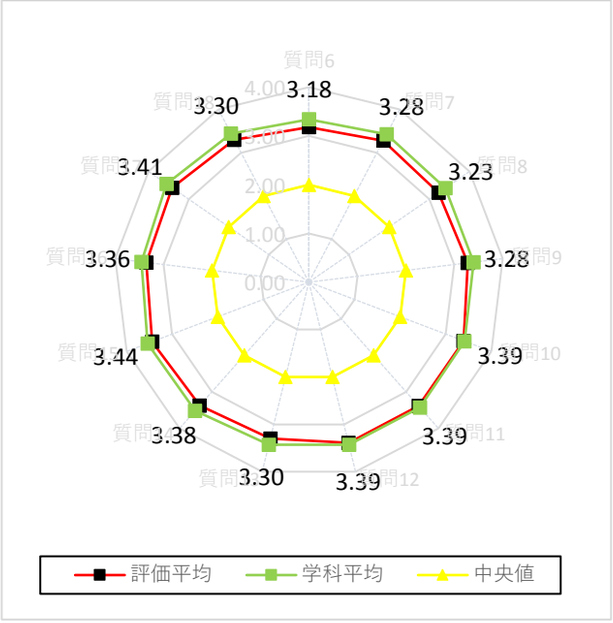
（３）次年度に向けての取り組み

講義の冒頭、毎回前回の講義の小テストを行ったり、単元ごとのプリントを渡すのは歓迎されており令和２年度も引き続き行う。私の今までの講義は文章ばかりのプリントをもとに、必要に応じてテキストの図を使ったスライドを用いた講義を進めてきた。この形式は不評ではなかったが、退屈と思われるので全面的にスライド方式に改める。メリハリをつけた講義内容にも気をつける。また、講義の際の私の話ぶりには昨年に引き続き気をつける。
1)小テスト問題は歓迎されているが問題数が多すぎるので精選する。看護国家試験に慣れてもらうために若干国試問題を付け加える。
2)今までの講義内容の取りまとめのプリントは残すが、講義の説明にはスライド中心に全面的に切り替え、できるだけ分かりやすく語りかけるように行う。
3)講義にメリハリをつけるために、＜ポイント＞と＜キーワード＞を各章の最後に箇条書きにした項目を付け加える。
4)私の声の大きさ・明瞭さ・話す速度などについては、大きく口をあけて、ゆっくり目の速度で話すよう努力する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病態治療学Ⅲ（筋・骨格、感覚器）	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

・初年度ということもあり、学生の学力がよくわからない部分もあり、また配布資料も十分整理されていなかったところもあったであろうと思われ、その結果が「難しい」という印象に繋がったのかと考えられる。しかしながら、「難しい」「講義内容が多い」「講義のスピードが速い」等のマイナス評価をしている割には、質問に来る学生は少なく、また、公開している質問用メールの活用も特定の学生のみであった事を考えると、学生側の講義に対する真剣さに多少疑念を持たざるを得ない。

（３）次年度に向けての取り組み

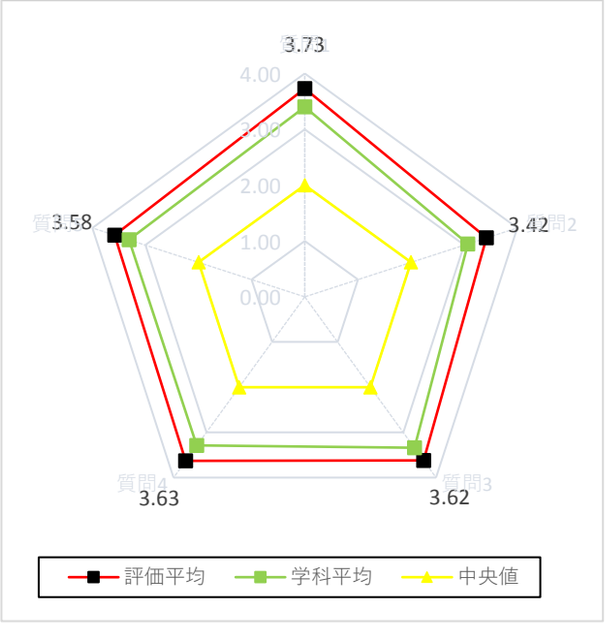
１）講義資料・スライド資料の簡素化、２）講義で取り上げる項目の削減（2019年度は周辺知識の部分がやや多すぎた）

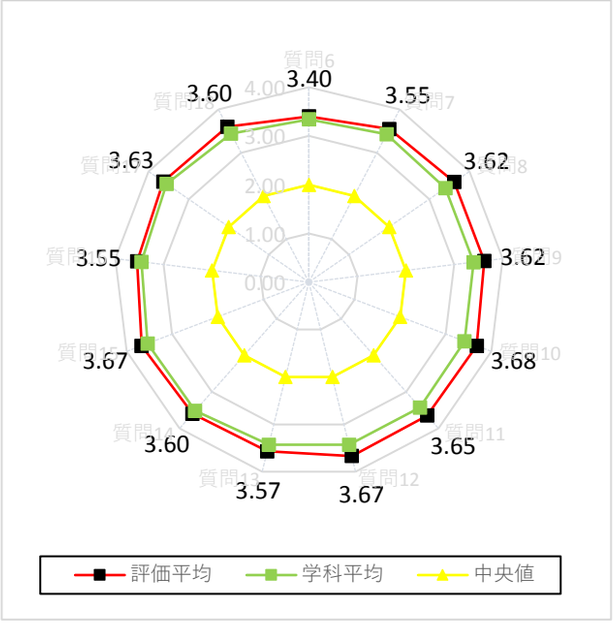
上記２点を考慮して、2020年度の講義に取り組みたいと考える。

＊昨年度は学生の「日本語のリテラシー」の低さが目立ったので、学科において改善に取り組んでいただけるとありがたいです。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		病態治療学Ⅳ（神経・難病、精神疾患）	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

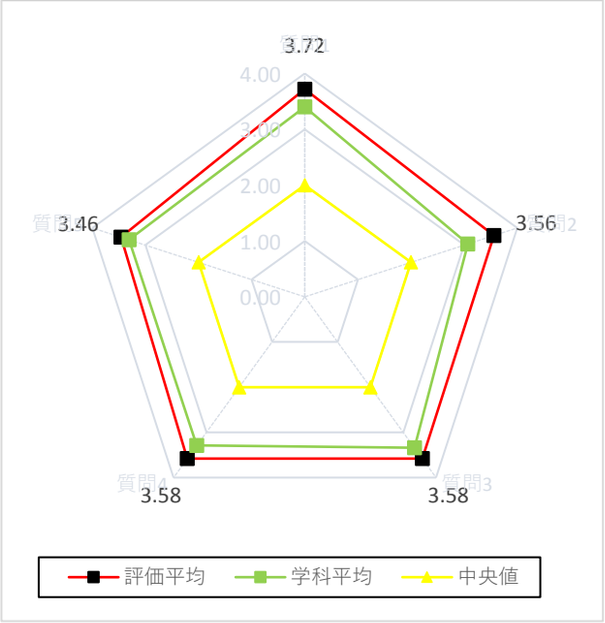
オムニバス授業であるが、平均として学科平均相当の結果を得ており、概ね良好と評価した。

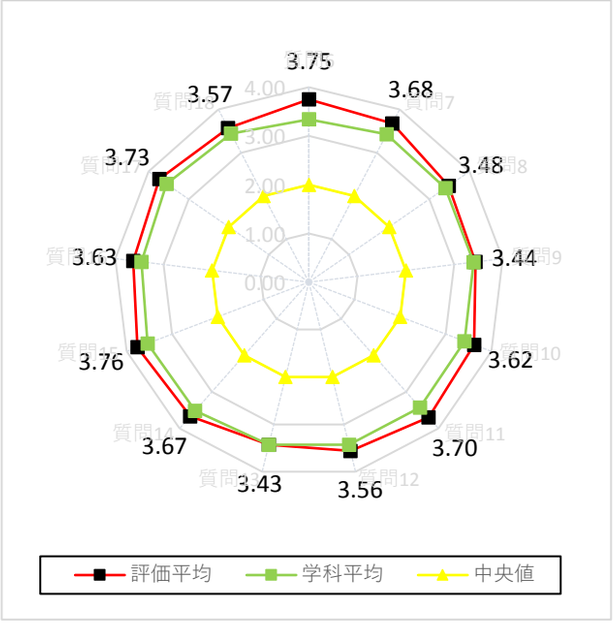
（３）次年度に向けての取り組み

1年次の基礎科目（解剖生理）の学力が十分習得されていないため、復習をしながら進めていかざるをえない。できれば1年次の学習強化をお願いしたい。
神経分野も精神分野も重要な領域であるため、独立した科目として取り扱うのが望ましいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護学原論	98名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

この授業を担当して2年目になる。初年度はナイチンゲール『看護覚え書』の古典をテキストに使用した。その結果、看護の本質への理解はできたが看護学全般にわたりその道しるべになる看護の国際性や専門職としてのキャリア開発などの視点が弱いことに気づいた。今年度は、テキスト『看護学原論』南江堂出版を使用した。合わせて、教員から提示する資料は昨年同様のものとし、『看護覚え書』は参考書として示したため、『看護覚え書』の目次、序章、第1章を資料として全学生へ配布し、抄読しポイントのとらえ方を説明した。合わせて、ナイチンゲール『看護覚え書』の映画化されたDVDを視聴し理解を深めた。

加えて、公衆衛生学領域の教員から、ヘルスプロモーションと健康を獲得する手段、保健師助産師看護師法についての解説を教授した。

臨床看護学領域の教員から、事例を中心に看護の実際について、リアルな対応を理論的裏付けのもとに教授した。

その結果、自由記述に「ナイチンゲールが学べて良かった。」「看護の本質に迫る講義がよく理解できた」の意見も見られた。

全学生の授業評価は、全項目とも学年の平均またはそれ以上を示している。

（３）次年度に向けての取り組み

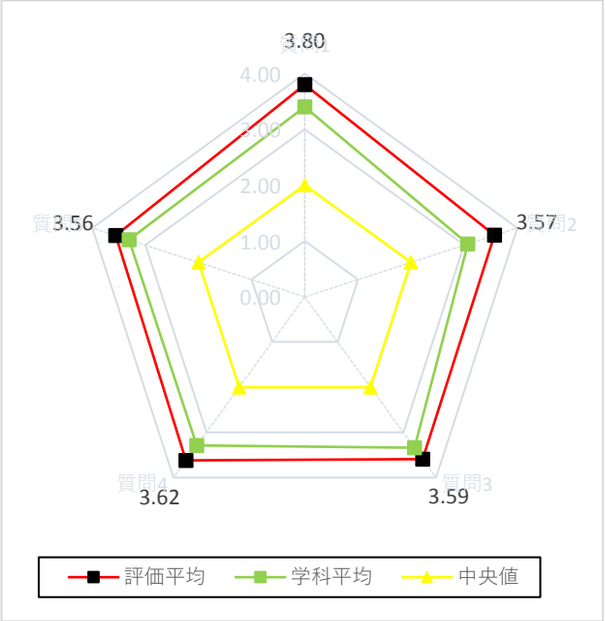
この授業を看護学科の教員と共に担当して3年目を迎える。次年度も、公衆衛生看護学領域と臨床看護学領域の教員と共に、看護の本質を理解し看護の創造性を育成する教育を継続していく予定である。テキスト『看護学原論』は、改訂（第3版）され、内容が学生により理解されやすいように編集されているため、使用する予定である。さらに、看護学原論であることから、抽象的な看護について学生が自分自身の言葉で関連する医療職に対して、看護専門職は何を目的として活動する職種であるかが説明できるように育成したい。

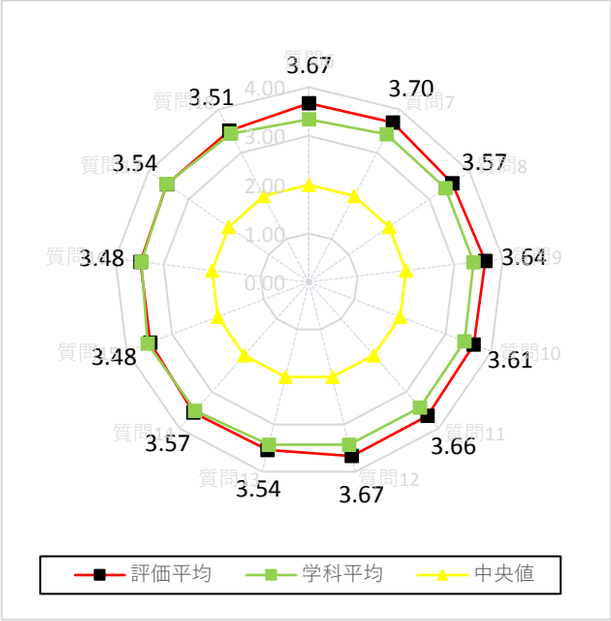
次年度のポイントは

①保健師助産師看護師法を根拠にして各看護職は何をめざして活動するか法的概念が説明できる
②看護の歴史からその変遷を学び今日の看護の発展を理解し、未来の看護の在り方を見通すことができる
③臨床事例から看護職の関わり方を学び、看護実践に必要とされる倫理の重要性を理解する
④看護の国際性を学び、看護学を学ぶと共にキャリア開発について考えることができる
⑤WHOの健康の定義を学び、看護の役割である健康の維持、増進、疾病の予防、苦痛の軽減、安らかな死への援助等を理解し実践できる専門的知識、技術を学ぶ

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護過程論	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

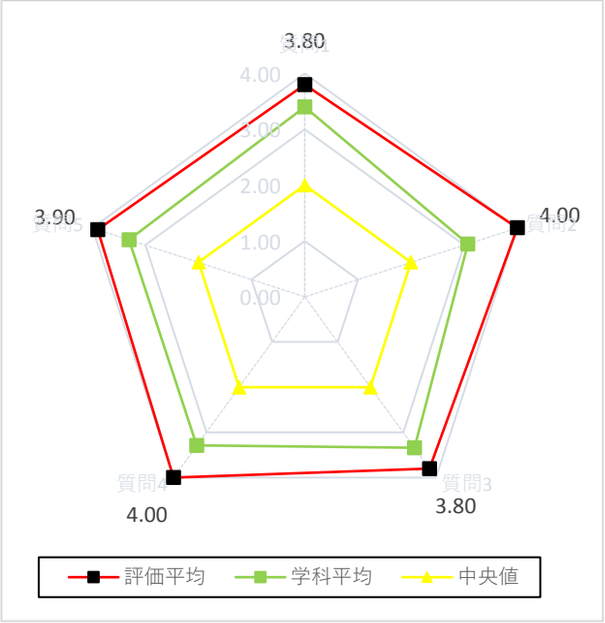
【総合評価】61名の回答者中、56名が「３」または「４」の評価であり、全項目がほぼ3.5以上の高い評価を得ることができた。
【肯定的評価）Q16(双方向授業）、Q15(公平性）がわずかに3.5を下回ったが、その他の質問項目は3.5以上の評価を得ている。
Q１～５は、学生自身の取り組みついての自己評価であり、真面目に出席し、課題に取り組んでいたことを自己評価できている。
Q6以降は教員や授業進行に関する評価であるが、ほぼ肯定的な評価を得ることができている。特にQ７（目標の明確化）、Q9(わかりやすい工夫）、Q10～11(教材の活用）、Q12(教員の話し方）については、3.6以上の評価を得ており、今後も継続すべき点と考える。
【改善点】3.5を下回った項目としては、Q15(公平性）、Q16(双方向授業）であった。グループワークを主体としたアクティブラーニング形式で授業を進めているため、消極的な学生にとっては双方向の実感や公平性を感じる機会がなかったのかもしれない。
本科目は思考のトレーニングであることから，個人ワークとグループワークをうまく活用しながら理解を進めていける取り組みを考える。

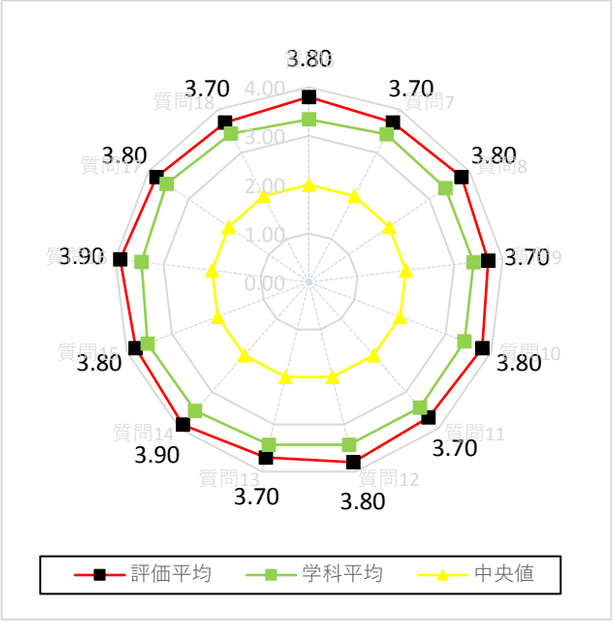
（３）次年度に向けての取り組み

１．講義については現在の高評価が維持できるよう継続する。
２．事例の検討（初学者がイメージしやすい疾病・看護問題でありながら，その後に控える看護過程論実習に有用となる内容の検討）
３．個人ワークをベースとし，グループワークを活用しながらも個人の思考力を高めていけるような演習課題の提示を検討する。
４．講義開始時の授業内容や目標の確認，前回の内容の復習を取り入れる

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		フィジカルアセスメント	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

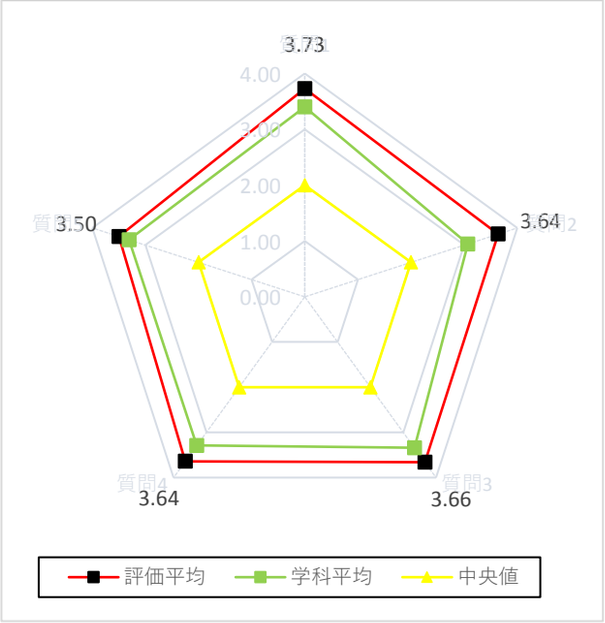
今回の講義では、教員が一方的に話し続ける座学授業をやめ、極力、目で見る、手で触れる、耳を当てて聞く、地域の人と話すという体験を取り入れた演習方法を多く取り入れた。また、教員側の一方通行的な授業にならないように、できるだけ学生に話させる授業を進めていき、授業終了ごとにリフレクションペーパーを活用し、授業を受けた学生の学びや考えをみていくように心がけた。しかしながら、授業配分が難しいところもあり、説明が早すぎたり、時間がなかったりして、聞き取れない学生も多かったと考えられる。

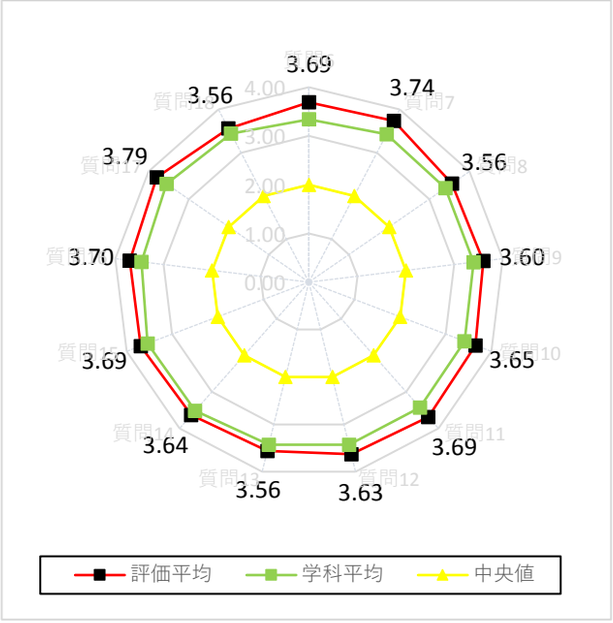
（３）次年度に向けての取り組み

フィジカルアセスメントは、やはり体を診る演習である。女子学生が多い中、男性教員ができる範囲は限られる。そのため、他の領域の教員に協力してもらう必要があった。今後もこの傾向は続くと考えられる。そのため、学生の演習場所や時間の配分を工夫していく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		生活支援技術論	99名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本科目は大学教育を初めて受ける学生の科目となるため、昨年度は初回の講義でシラバスとは何かからシラバスの説明を行っていたが、質問2の評価が低かった。そこで、本年度は学修の視点、つまり評価の視点でもあることの説明をさらに強調した。

学生にとって、成績に関わることが最重要になるので効果があったと考える。成績は昨年度より向上しており、シラバスによる授業目標と評価内容の説明は成績にも効果的だったと考える。

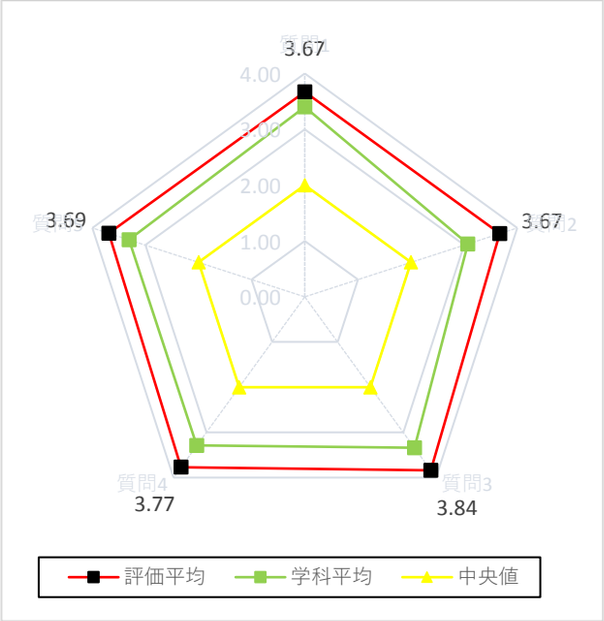
オムニバスの科目であるため週1回の領域会議を行い、授業案を検討し他教員からの助言を受けて修正していった。また、共通理解をして指導を行っていった。そのためか全項目の平均は概ね良かったと考える。しかし、各講義後のリフレクションには少数ではあるがスピードがついていけないとの感想があり、理解力の低い学生への対応は課題であると考える。

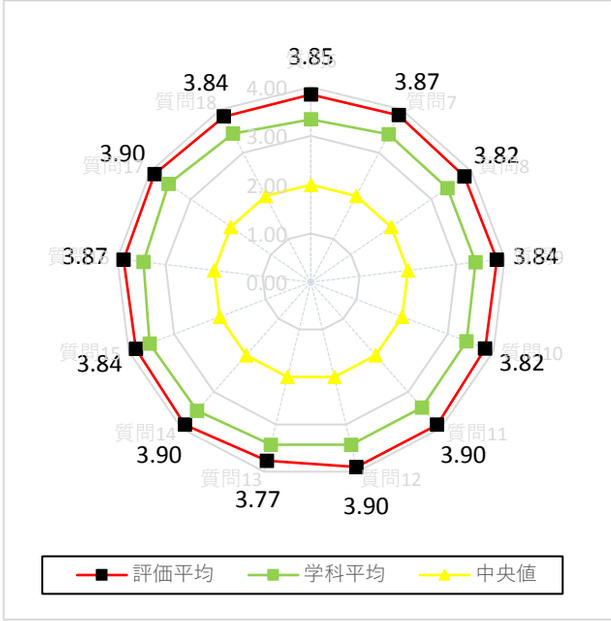
（３）次年度に向けての取り組み

オムニバスの講義であり、今後も領域会議・演習後の教員の振り返りを確実に行い、全教員が学生を把握したうえで、公平で効果的な講義・演習指導ができるようにしていきたい。また、全学生が理解できような授業案を担当教員全員で検討していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		生活支援技術論演習	99名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

昨年度はシラバスの活用の評価がやや低かったため、初回の講義でシラバスの見方と評価の視点について結びつけての説明を詳しく行った。その結果、本年度はシラバスの説明の項目も平均3.85と学生の理解が得られたと考える。

オムニバスで行う講義であり、各教員差が学生の学修にとってどのように影響するのか懸念していたため、昨年度同様、週1回の領域会議を行い、各講義の講義案（資料を含めた）を全員で検討後、修正していった。授業の資料や声の大きさといった授業方法は3.9と高得点を得ているので、学生の望む授業スキルでの提供ができたと考える。

初めて学ぶ専門科目で学生にとって疑問の多い科目であるが、人前で質問できない学生が多く、各講義終了後にリフレクションペーパーに感想や質問を記入してもらい、質問については次回の講義で回答していった。その結果、質問への誠実な対応において高得点が得られたと考える。

全体の評価は平均であり、低い学生がいると考える。全ての学生が看護師としての能力を修得できるために、学生一人一人が満足できる授業を提供し、全員の学生が修得できる工夫はさらに必要だと考える。

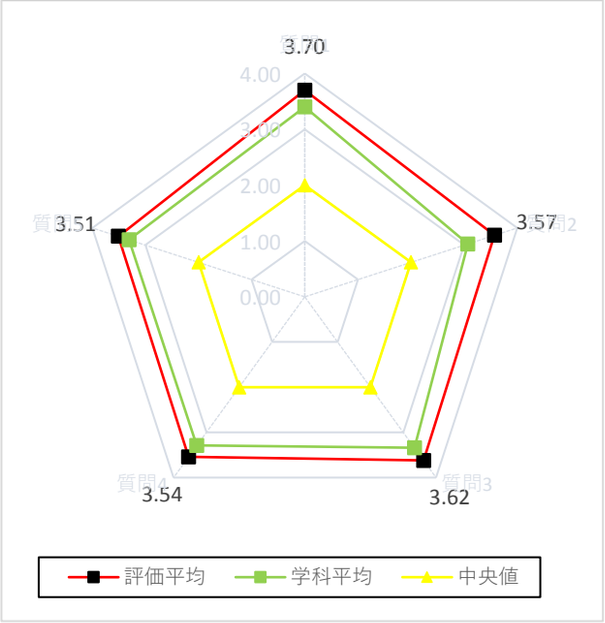
（３）次年度に向けての取り組み

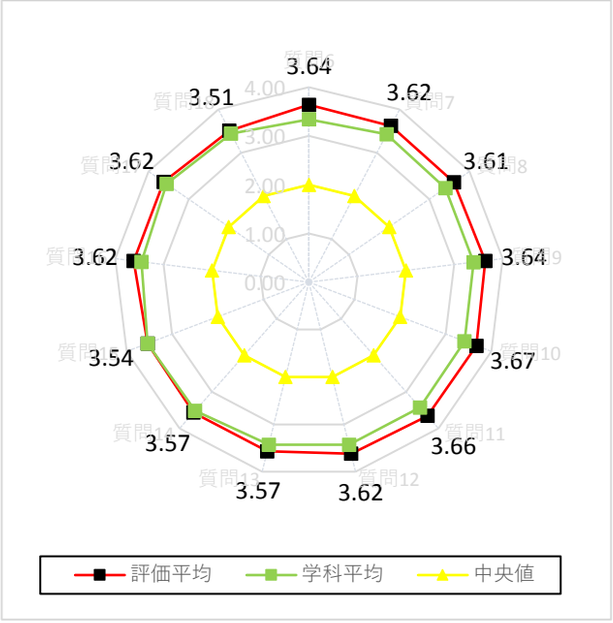
大学生としての初めてのシステムなので、前期に説明していても理解が十分でない学生が多いため、後期でもシラバスについての説明を詳しく行い、学修の視点と評価の視点との関係を理解して学習に臨めるように説明を継続していく予定である。そのことによって、学修へのモチベーションや技術の修得に繋がるようにさらに説明内容を学生の理解度に合わせて工夫したい。

学生の理解度は様々で一人ひとり全員が理解できるように授業方法の工夫をしていきたい。そのためには来年度も週1回の領域会議を継続し、科目担当全教員で講義前後に授業案を検討・修正をしていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		臨床関連技術論演習	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

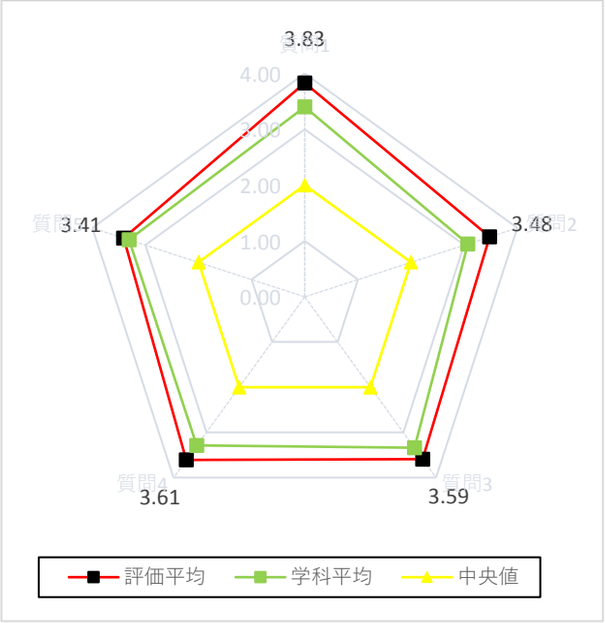
【総合評価】Q18において回答者61名のうち「4:良い」34名、「3:やや良い」24名、評価平均3.51と高い評価が得られ、全般的にも学科平均との大きな差はなかった。
【肯定的評価】Q7（授業の到達目標の明確化）については、授業開始時に各単元での学習目標を具体的に明示し、目標に沿った講義・演習内容であったことが評価されたと考える。Q9（授業の工夫）、Q10（適切な視聴覚機器・板書）については、初めて見る医療器材を書画カメラを用いて紹介したり、看護技術における手元の細かい動作を天井カメラで拡大し映し出すなど視覚的な効果を活用したことが評価されたと考える。
【改善点】Q2（学生自身のシラバスの活用）、Q4（学生自身の授業理解の工夫）の項目はいずれも「2:あまりそう思わない」5名であった。シラバスに記載している事前学習をより具体的に記載する、教科書以外の参考図書を図書館に充実させるなどし、学生が主体的に学修に取り組めるよう工夫していく必要がある。

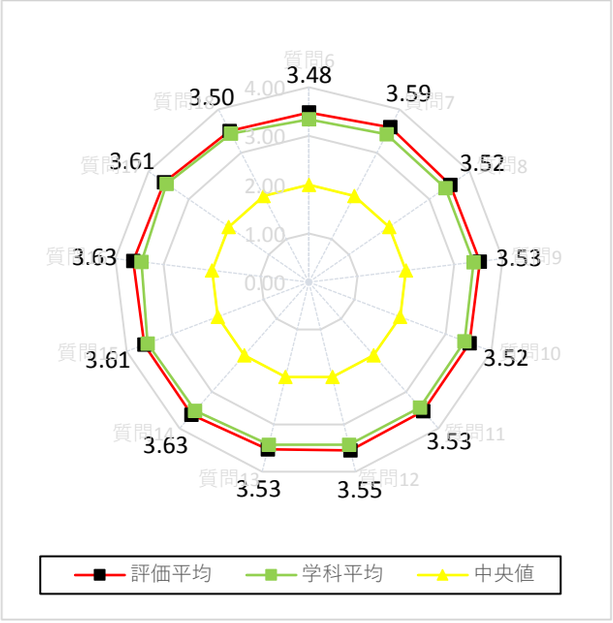
（３）次年度に向けての取り組み

①高評価が得られた内容については、維持できるようにする。
②学生が主体的に授業内容の学習に取り組めるよう、事前学習についてシラバス等活用し明示する。
③学生の理解を助ける図書やDVDなどの視聴覚教材などの充実化を図り、紹介する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護過程論実習	90名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

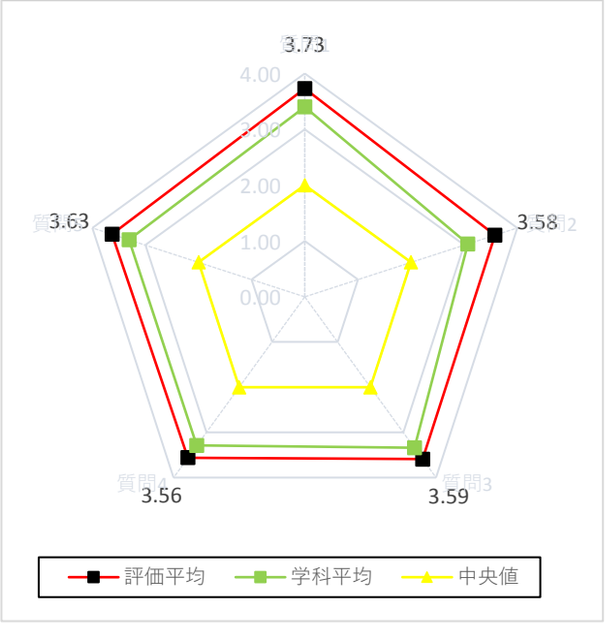
【総合評価】Q５（自己評価）、Q6(シラバスの活用）以外は3.5以上の評価を得ており、おおむね好評価が得られた。
【肯定的評価】学生自身の振り返りに関する項目は、出席状況を筆頭に概ね評価が3.5であった。3.5以下であったものは、Q2(シラバスの活用）、Q5(自己評価）であるが、3.4以上獲得している。実習科目であるため、学生がどの部分を想定して回答しているのか不明な部分もあるが、科目の運営・進行、教員との関わりにおいて概ね肯定的であり、自由記載からも「2週間実習のご指導ありがとうございました。」「頑張った」「看護過程を自分で展開していくのはすごく時間がかかって大変だったけど、内容を充実させることができました。」との意見が確認できた。
【改善策】実習科目であったため、シラバスよりも実習要領を活用していたため、Q2(シラバスの活用）が3.5を下回ったものと考えられる。評価質問項目が変更されない限り、今後も継続されると考えるので、実習科目用に質問項目の修正を臨みたい。Q5(自己評価）については、実習後の評価面接で、学生の良い部分を強化できる関わりをしていきたい。

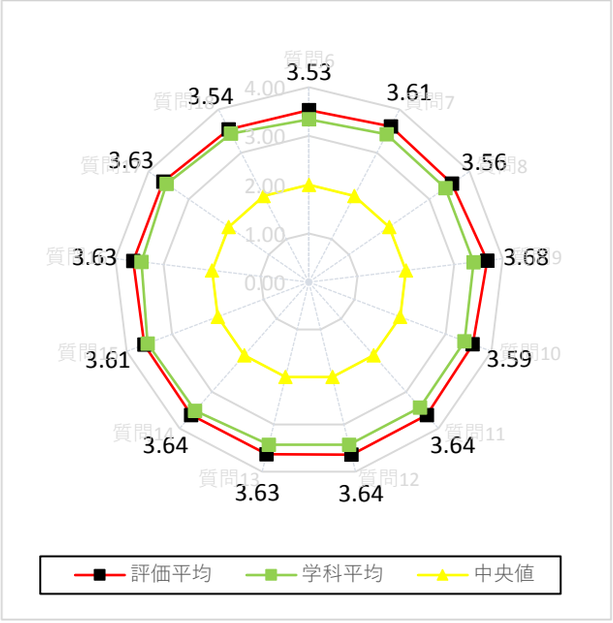
（３）次年度に向けての取り組み

１．実習オリエンテーションにおいて、シラバスと実習要領は一体である説明を行う。
２．実習後の評価面接で、学生の良い部分を強化できるフィードバックに努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学概論	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

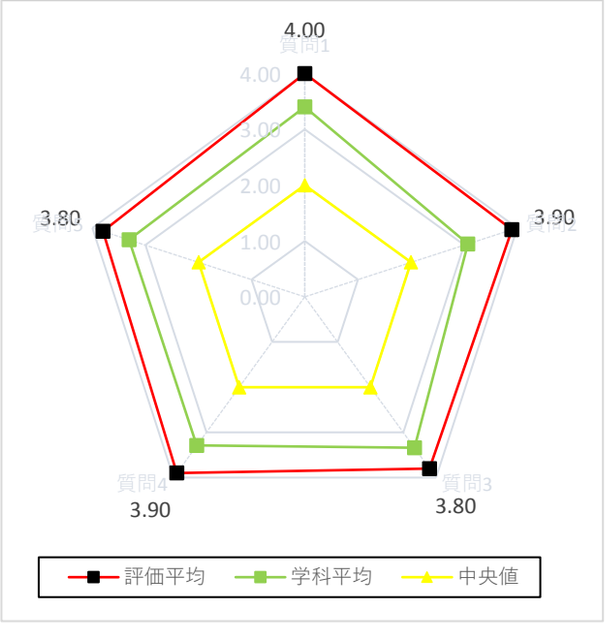
質問４の「授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」と質問16の「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。」について、教員として、意識して授業中に問いかけなどの仕方、また学生自身が理解するための工夫ができるような質問内容を行っていなかったと反省する。1時限目（8:50分開始）の授業でもあり欠席が目立ったこと、授業終了後の定期試験では、ほぼ2割の学生が再試験対象者になったことなどから、授業内容の理解が不十分であったのではないか、もっと工夫する必要があったのではないかと考えている。

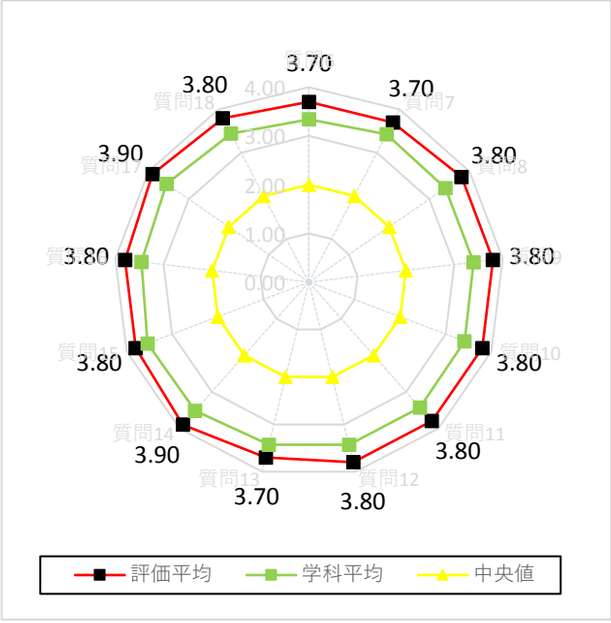
（３）次年度に向けての取り組み

授業内容の理解を深めるために、事前・事後学習の勉強の仕方にｅ-ラ-ニングの使用、授業中にテーマを与え、グル-プディスカッション等を取り入れ、学生参加型の授業展開を取り入れて行うなど工夫していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		成人看護学方法論Ⅰ	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

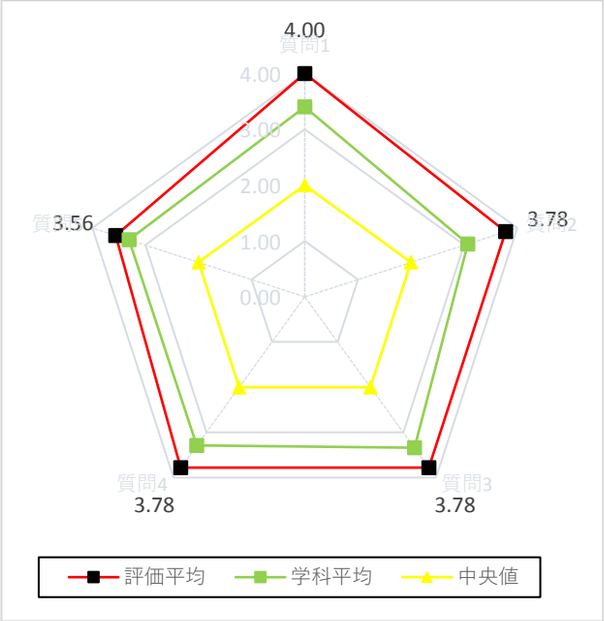
急性期領域の中で、周手術期に焦点を当て講義・演習を展開した。対象事例は、臨床で数多く経験する事例や国家試験出題頻度の高い事例を採用した。また、知識習得確認と思考整理及び臨地実習のイメージ付けのためシミュレーション演習を2事例展開した。講義については2コマ連続で構成し、前半は解剖生理などの知識確認を中心に行い、後半は必要な看護について考えられるように組み立てた。PPTと配布資料を変えることで集中力を高め思考すること・電子黒板や動画利用などを工夫した。学生の主体性を促す目的と看護者としてのコミュニケーション能力育成を踏まえ、アクティブラーニング技法を活用した。また、学生の反応に対するフィードバックを丁寧に行うよう心掛けた。学生からは「疾患の勉強ではなく、看護の勉強だった。丸暗記では看護はできないことが分かった。1年の時に習ったことが看護と結びついた。復習しようと思った」などの声が聞かれ、授業が進行するにつれて看護者としての自覚が促された印象である。

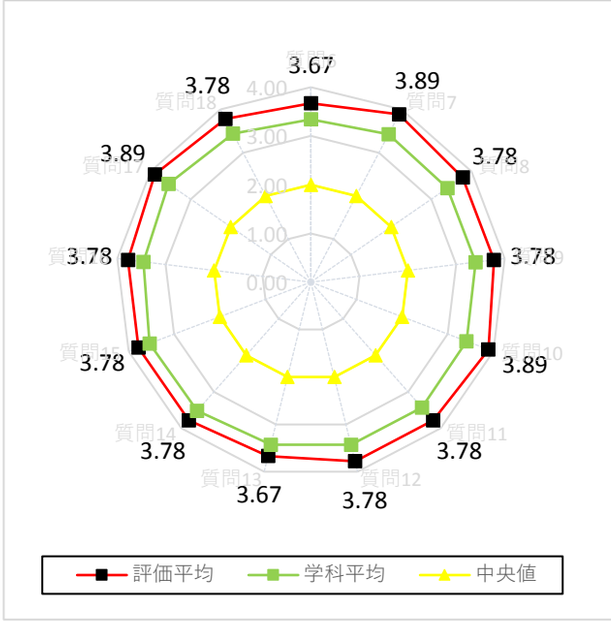
（３）次年度に向けての取り組み

麻酔や疼痛コントロールに関連する専門領域の講義がないことは、カリキュラム改定時に検討が必要である。臨地実習で経験できる疾患が少ないことから、国家試験に出題頻度の高い疾患については、講義内で補う必要があり2020年度は採用疾患を増やす予定である。看護過程の展開については、今年度同様に部分的に講義で活用し、演習で一連の流れを実施する方法で行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		看護診断論	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

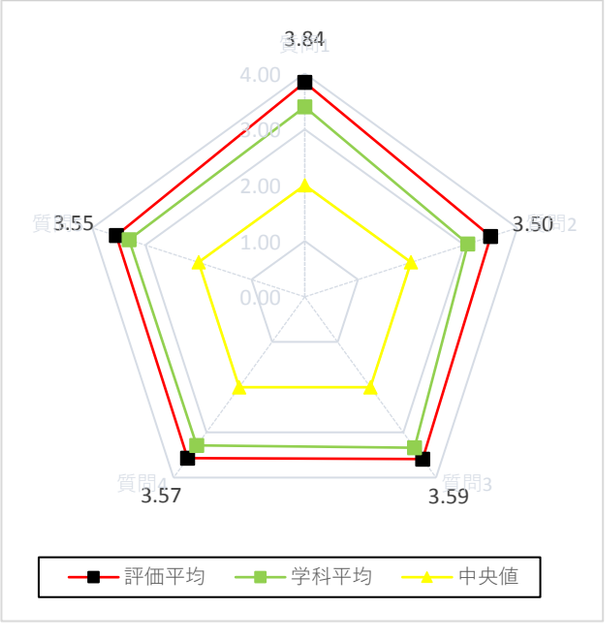
看護診断は、看護過程の構成要素のひとつであることを重視して、最初に看護過程全体の解説を行った。その後、学生の弱みである情報収集についてグループワーク「質問つくり」を取り入れ、実際の臨床現場（実習）でどのように問診・情報収集を行うかを検討した。その後、看護で解決できる問題が看護問題/看護診断につながり、関連因子を明確にすることの重要性を講義した。また、事例を用いて看護過程を展開したり、実習で迷う看護診断について解説を行った。集中講義であり座学のみでは集中力に欠けることからアクティブラーニング技法を活用した。臨床経験（実習経験）の浅い学生にとって、対象となる患者をイメージすること・対象が困っていることや一人でできないことを想像することは困難であり、繰り返し学修することが必要である。また、各領域の学修が進んでいない状況での看護診断理論の理解は難易度が高く、学生に興味関心を持たせることが困難であった。シラバスについては、年度初めに提示した内容から、学生のレディネスを把握したのちに修正を行い、第1回目の講義でオリエンテーションを行った。

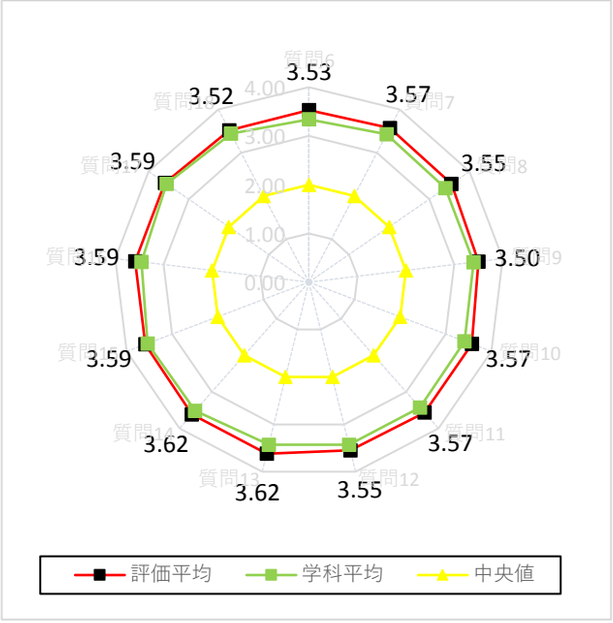
（３）次年度に向けての取り組み

2019年度は、年末12月の体調不良者（インフルエンザ等）が多い時期に連続3日間での集中講義であった。8回開講であり出席日数確保のため体調を押して受講する学生がいた。また、連続講義で集中力を欠く学生もいた。このため、次年度は連続での開講とならないように開講日の検討が必要である。また、基盤学領域の看護過程や臨地実習の結果を踏まえて、中範囲理論の講義を検討したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		老年看護学概論	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

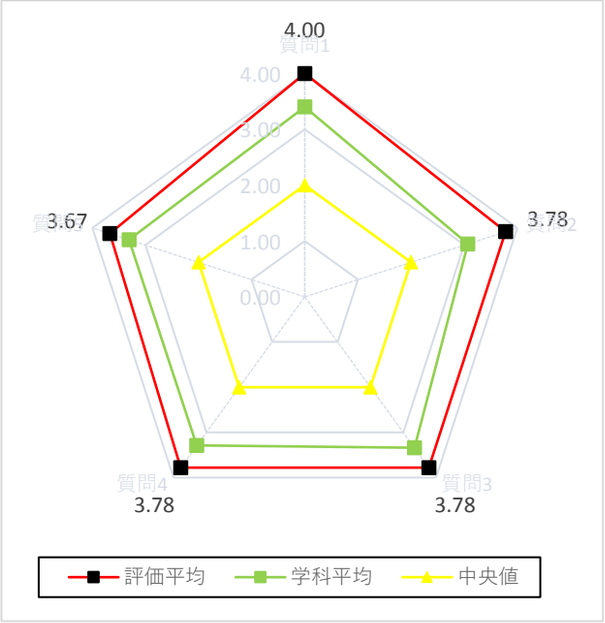
総合評価（質問18）は3.52、学科平均の3.43より高い。
すべての項目評価が3.5以上で、ほとんどの項目が学科の平均より高い評価が得られていた。
13.進む速さと14.質問への対応は3.62と高かった。学生の出席1.も3.84と参加態度も良く、
5.学生の総合自己評価も3.55と学科平均の3.38よりやや高い結果だった。
概念や理論的な学習内容が多く、1回のみの講義だけでは理解不足があると思うので、事前学習・事後学習が大切である。
適宜、過去の国家試験問題を入れ、解説をしていき、学修のポイントをおさえることに繋がった。
地域高齢者との交流は会話等を通して実感として高齢者の理解につながったと思う。
また、オムツ体験は倫理的感性を高めるのには役立った。
演習では学生の参加が主体であるので、参加態度にも影響していたといえる。

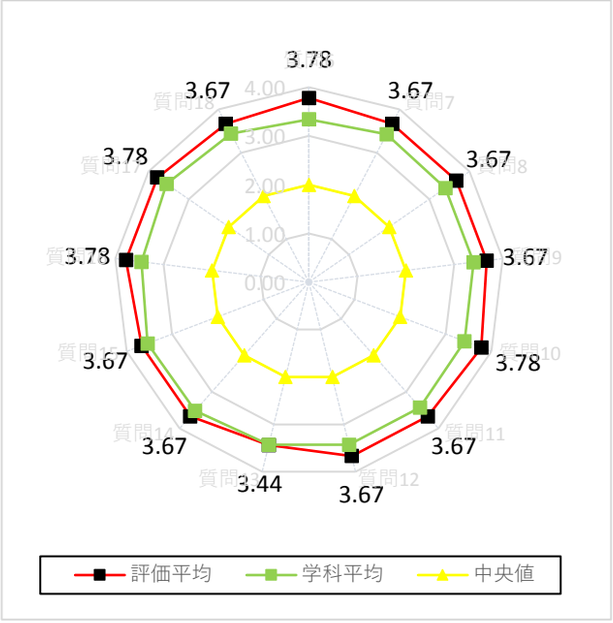
（３）次年度に向けての取り組み

理論については予習・復習で補うことの必要性を説明し、国家試験問題を何問か入れて授業を進め関心を高めたといえるが、
国試問題を学習の動機づけにすることや解答の解説や考え方をもう少し詳しく説明し、理解を深められるようにつなげたい。
また、地域高齢者との交流は学生にとっても興味深く地域の方と触れ合ういい機会だったが、
次年度は交流の方法が無理な場合は、対面でない遠隔によるインタビューの方法をとり課題をまとめるなど検討し進めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		老年看護学方法論	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

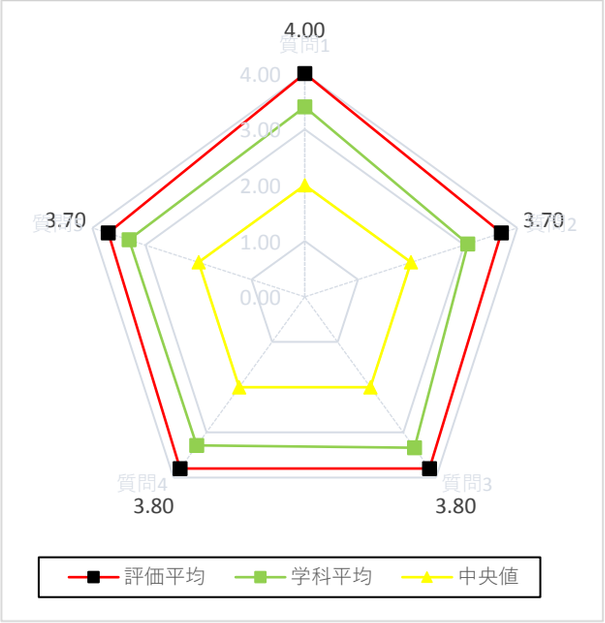
総合評価は学科平均の3.66とほぼ同じの3.67であった。6.シラバスの説明は3.78と高い。
10.視聴覚機器についても3.78と高く、学生全員にノートPC持ち込みでe-ラーニング、スキルスラボを用いた学習形態をとったためといえる。
16.双方向的なやり取り、17.教員は熱心も3.78と評価が高かった。
講義はテキスト・PP・資料を中心に用いて行い、臨床的に良くみられる状況をイメージしやすくDVDやイラストを用い、
シミュレーション教育も行い、分りやすくした。
病態の理解は時間不足もあり、不足を感じた。そこで、他の関連科目との関連性を強調し、積み重ねの学修を促した。
13.進む速さは学科平均3.61に対し、3.44とやや低かった。
看護過程はe-ラーニングを用いた学習方法も加え、レポート提出まで進めることはできたが時間を要した。
時間不足もあり、技術的な演習はあまり実施できなかった。
9名の回答であったので、最終の講義が後期ギリギリの日程で終了し、定期試験に入ってしまい、回答が少なかったと思う。

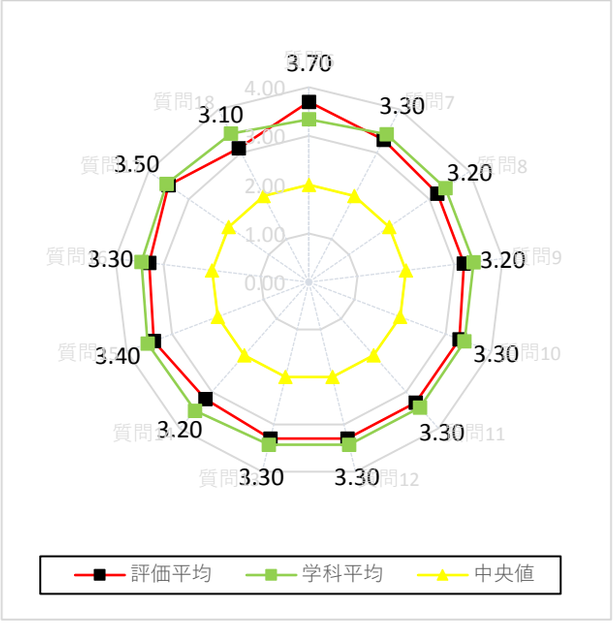
（３）次年度に向けての取り組み

看護過程の学習は予習・復習の課題を明確にし、時間配分を行い、目標達成を行いたい。
嚥下障がい者への口腔ケア・食事介助については講義ととろみ材を用いた食事摂取の体験は
各自で実際に飲み込みを実演させるよう、今後、演習方法を検討する。
授業評価は後半の授業の早めに周知し多くの回答を得るようにしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		母性看護学概論	92名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

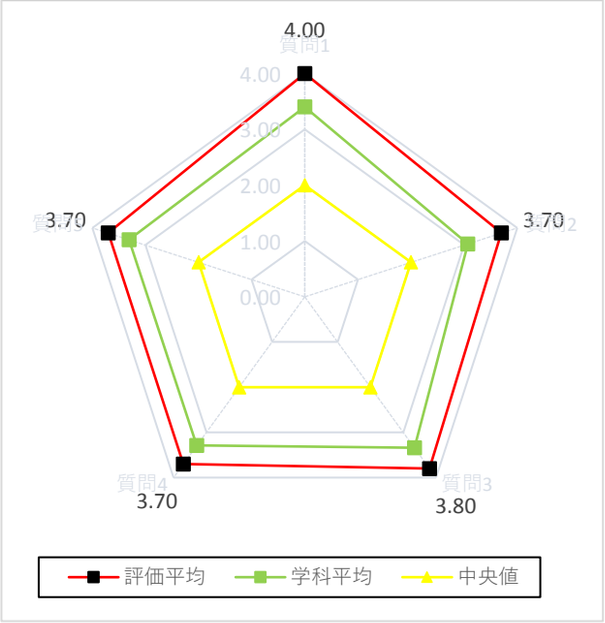
1. 学生の専門的領域に対する理解度などがが不明であった。そのため、必要と思われる講義内容を示したが、難題な言葉が多く理解が出来ていなかった。
2. 授業構成において、専門教育科目の病態治療学Ｖに内容を基本としての展開を考えていたが、婦人科疾患に偏り学生が基礎的知識を理解していない状況での授業であった。
3. 試験科目も事前に提示したが、約半数の学生が再試験であった。再試験対象者と個人全てと面談し、理解内容を確認したが、専門用語や説明内容を十分理解できていない学生が多くみられた。学生が2極化していると思う。
4. 学生自身に対して、15コマそれぞれに対してポートフォリオ課題で自己学習することが前提であり、提出・評価することで学生自身にとっては大きな成果が出たと考える。
5. 学生に仮題提出を行うことで大きな達成感はあったと思うが、根拠の意味が充分理解されていない
。
6. 友達と横並びの感覚で、高校時代の延長感覚で、今をクリアしていけばいいと思っている学生の今後指導方法の検討する必要がある。
7. 教員の思いと、学生の学びの意味の統合が必要である。

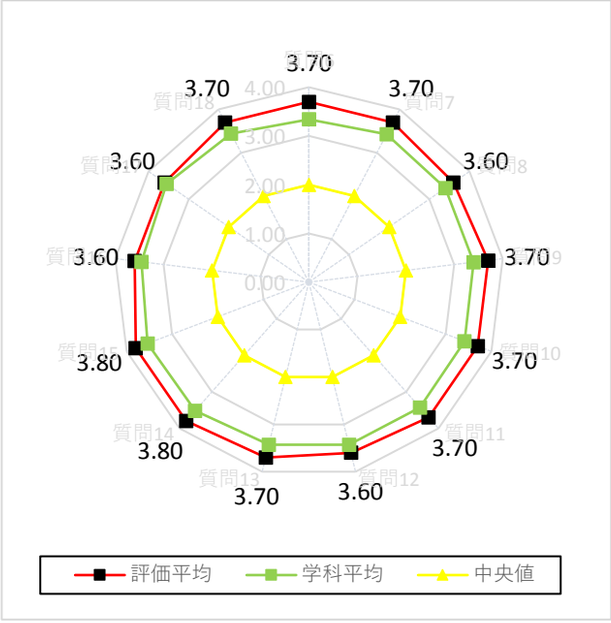
（３）次年度に向けての取り組み

１．学生の理解度を十分把握し、基礎知識に関して次年度の基礎知識の非常勤講師による授業で、母性の特殊性や病態をまず理解してもらう
２．広範囲の課題があるが、基本的な内容に重点を絞り学生自身が自己学習をすることや、グループワークを実施して理解力の向上に努める
３．１５コマのポートフォリオ課題は、学生自身の思考過程や理解量が見えるので、今後も継続していく予定
４．ポートフォリオをeランニングで提示することにより、タイムリーな学生の学習状況が見えること、個々の学生の学習状況に対応できるなどのメリットを考えて今後提供できればと考える。
５．専門用語や知識の獲得に対しての学習提供をどのようにすれば効果的であるかを検討し、授業展開に用いて、学生の理解力を高める。
６．学生同士での課題に対して授業プレゼンテーションを行うを行う。
７．次年度の再テスト者を減少する。
８．約１００名の学生への対面方式授業と、課題提供で小グループ学修の工夫しを検討することで、学習能力を高める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		関連職種連携論	93名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

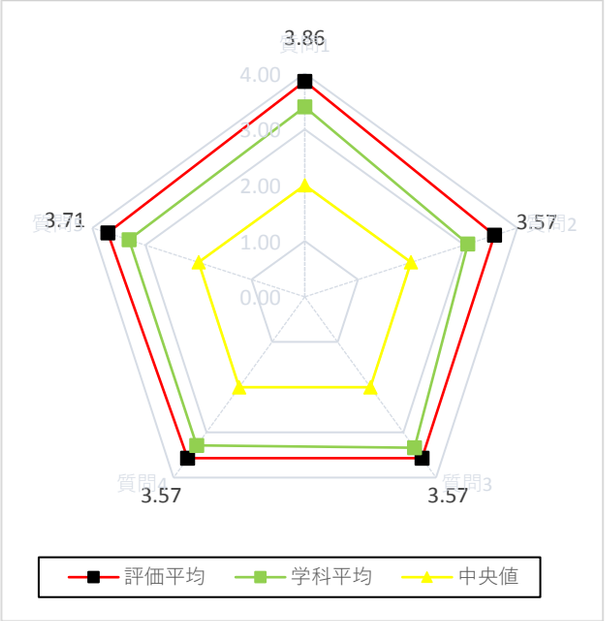
オムニバス科目のため代表者が記述することになっている。

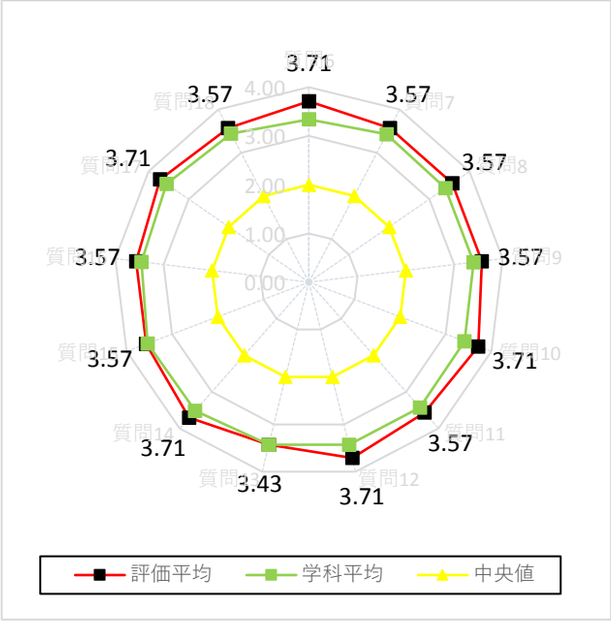
（３）次年度に向けての取り組み

オムニバス科目であるため代表者が記述することなっている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		家族看護学	82名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

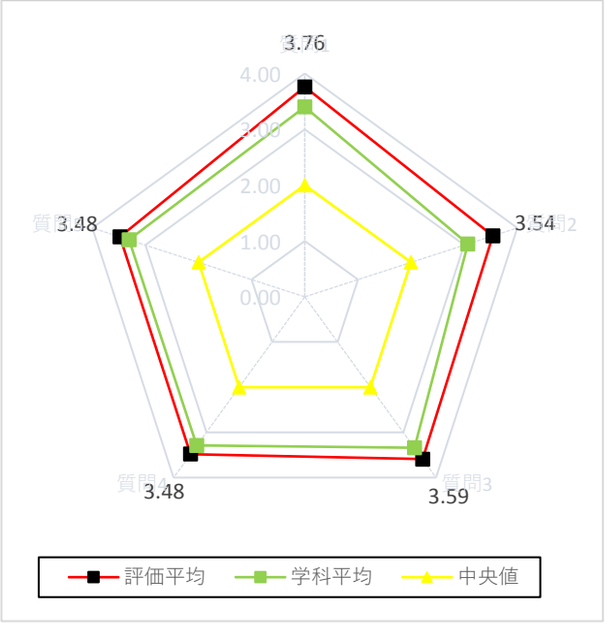
学生自身の総合評価（質問5）は、学科平均の3.62より高い3.71で、授業に対する総合評価（質問18）は、平均3.57で学科平均3.66よりやや低いが、いずれも高評価が得られたと考える。
しかし解答者数は7名（受講者82名）であり、対象学生の評価を反映しているとはいえない状態である。
本科目は、学生自身の身近な存在である家族に焦点を当てており、理論やアセスメントモデルの説明では具体的な看護実践事例を挙げて紹介したため学生にとっては興味が持てる内容だったと考える。
授業の進む速さ（質問13）は学科平均の3.61よりやや低く平均3.43となっているが、
本科目は他領域にわたる内容であることから学習量が多いこと、ロールプレイの演習等に時間を費やしたことなどが影響していると考える。

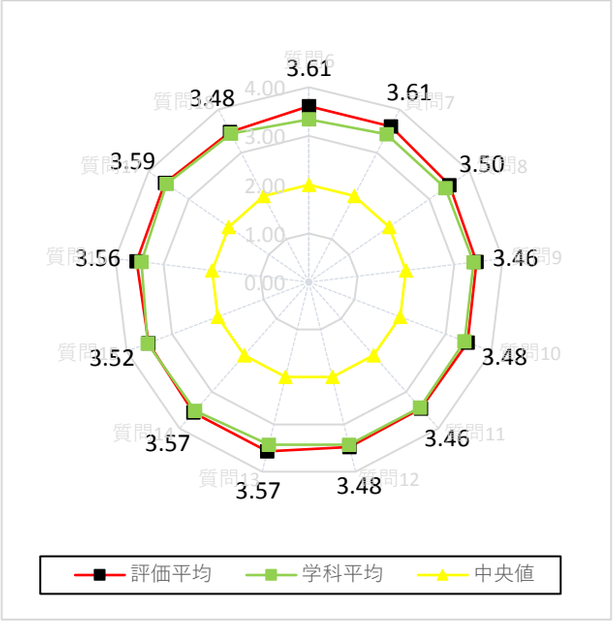
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、担当教員が2名追加するが学習量は焦点を絞り、学生が十分理解できるよう見直しを行う。
また、演習においては、より対象理解や対応力・共感能力が高まるよう事例を工夫し、効果的・効率的な時間配分をおこなう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
看護学部	看護		学校保健概論	76名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

この授業は、保健師課程や教職課程を希望する学生の履修必修科目である。予想に反し、それ以外の学生の受講も多くみられ、演習等にも積極的に参加し、学生自身の自己評価も高かった。また、授業評価の全項目において３．５前後の高評価を得て、活気のある授業に対する学生の満足度も高めであったと思う。

（３）次年度に向けての取り組み

授業の内容や方法について高評価であったので、学生たちの主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を意識したこの授業スタイルを引き継いでいきたい。感染症の動向を見極めながら、できたら演習等を取り入れ、学校保健の全体像や子どもの健康や安全にまつわる教育問題等の対応について、自ら考え、対話の中から答えを導き出し、学びが深まる授業を進めていけたらと思っている。